

ラザロの復活  
エヴァンスヴィラ インディアナ州 アメリカ合衆国  
1953年11月22日

1 ありがとう、ボズワース兄弟。

皆さん、こんばんは。

本日こうして、愛する主イエス・キリストの御名によって、

皆さんにお話しできることを心から感謝しています。

お元気そうな顔を拝見できて、本当に嬉しいです。

今日は、私にとってまさに「光に満ちた一日」となりました。

外の天気はどんよりとしていても、私の心の中は明るいのです。

私は今、これまでの人生で一度も知らなかったような深いかたちで、

主のご奉仕について学ばされつつあります。

2 昨夜……いや、正確には先週の火曜日の夜のことでした。

ビーラー兄弟、そして皆さん——もし録音を取っておられるなら、ビーラー兄弟、ウッズ兄弟にお願いしたいのですが——ぜひ、先週の火曜日の夜と昨夜の録音を確実に保存しておいていただきたいのです。私はどうしてもその録音を手元に残しておきたいのです。

先週の火曜日の夜、私はあることを試みた理由を皆さんにお話ししましたね。

そして昨夜のこと——私は聖霊の御働きがどのように動くのかをじっと見つめておりました。

すると、この礼拝堂の片隅、このあたりに口のきけない方々(ミュートの方々)のグループが座っておられたのです。

そして私は、その方々の上に、何かが漂うようにして現れているのを見ました。それは、ある人の上から次の人へと、まるで流れるように移っていったのです。

しかし私は、それをどう彼らに届けたらよいのか、正直わかりませんでした。

そして次に、その“もの”は会場の奥の方——後ろの方に立っておられたある婦人の方のところへと移りました。

その後、またこちらの隅の方へと戻ってきて、会場の中を絶え間なく動いていたのです。

私はこう思いました——

「今この瞬間、もし人々が“ただ信じる”ことができたなら……これが起こる！これは、あのイリノイ州ヴァンダリアで起きた、あの時のようなクライマックスになるだろう」と。

そして、ちょうどその時でした——

突然、私はそれが“**滴のように降ってくる**”のを見たのです。

私は言いました。

「ただ神を信じてください。そして、よく聞いてください。あなたは今までに一度も見たことのないことを見ることになるでしょう。」

3 それから次に私が覚えているのは……若者たちが私をどこか別の場所に連れて行って行ってくれていたことでした。

本当に、それは栄光に満ちた瞬間でした。

私は信じています——

ちょうど今、私たちの集会は「何かが起ころうとしている」その地点に近づいてきているのです。

人々も少しずつ、その意味を理解し、つかみ始めているのです。

ところで——今、ヴァンダリアの話をしました——

先ほど車を降りたときの事です。

ある婦人が、こここの会場のどこかに今もおられるのですが、彼女とその娘さんが私のところに来て、ヴァンダリアでの証しを話してくれたのです。

彼女はこう言いました——

(ちゃんと正確にお伝えできればと思いますが、ほんの数分前に聞いたばかりなので)

「先生がヴァンダリアにおられたとき、私はちょうど食器を洗っていたんです」と。

彼女はグレープフルーツほどの大きな腫瘍を持っていて、

そのとき、手を震わせながらこう聞いたといいます——

「主が言われたのです。『ヴァンダリアに行きなさい。癒されるために』と。」

それで、彼女はご主人のところに行って話しました。

すると夫はこう言ったそうです——

「それは無理だよ、君……手元には10ドルしかないんだ。

それは別のことに使わなくちゃいけないんだよ。」

4 それは土曜日のことでした。

彼女(証しをしていた婦人)は、あまりにも気落ちしてしまいました。

でも、その後こう祈り始めたそうです。

「主よ、あなたは私に語ってくださったのですから、今度はあの人(夫)にも語ってください。この10ドルをどうすべきか、あの人に教えてください。」

そして翌朝、雨が降っていた時のことです。

夫がやって来てこう言いました。

「ヴァンダリアに行きたいって言ったのは君だったよな？」

それで二人は出かけて行ったのです。

ヴァンダリアに着くと、雨でテント集会は中止になり、私たちは講堂に移っていました。

私はもう体力が限界で、ほとんど立っているのもやっとの状態でした。

彼女は「祈りのカード」をもらえなかったそうです。

そのカードを得て祈りの列に並ぶつもりだったので、とても落胆していました。

そこで私は言いました。

「皆さん、全員並んでください。

私はただ皆さんの上に手を置くだけです。

もし皆さんが、今まで見てきたことが真実だと信じるなら、私が手を置いて通り過ぎるだけで、皆さん一人ひとりが癒されます。」

この根拠は、神が私に語られた言葉です。

「もしあなたが心から祈り、人々があなたを信じるなら、祈りの前に立ちはだかるものは何もない」と。

しかし私はこう申し上げました。

「でも、私は人々に自分を信じさせることができません。教育もなく、話すのも下手で、何の魅力もない。何も持っていないのですから…。どうやって信じてもらえるでしょうか？」

すると主はおっしゃいました。

「モーセに二つのしるしが与えられたように、あなたにも二つのしるしが与えられる。

そのしるしによって、人々はあなたを信じるだろう。」

5 当時、私にできたことといえば、人の手を取って握ったり、その手に触れたり、あるいはその人の上に手を置いたりして、その人が何に問題を抱えているのかを示すことだけでした。

私は自分では何も言わず、ただ主が語られるままにしていました。主が語られることは、いつも百パーセント正確でした。

そして主は、もう一つのしるしも与えられるとおっしゃいました。

さて、とにかくその婦人が列にやって来ました。

後になって彼女はこう言いました。

「ただ、彼(私)が私の上に手を置いただけでした。」

彼女は、本当は私に立ち止まって祈ってほしかったのです。

自分に腫瘍があることやその他のことを、ほかの人たちにしていたように語ってほしかったのです。

しかしその夜は選択の余地がなく、ただ与えられたものを受け入れるしかありませんでした。

そうして私は彼女のために祈りました。

彼女は少し気落ちした気持ちで家に帰って行きました。

しかし、およそ1か月後、彼女は気づき始めました。

腹部にあった腫瘍の場所が、もう痛くなくなっていたのです。

そこで診察を受けに行くと、腫瘍はなくなっていました。

それ以来、腫瘍は二度と現れていません。

グレープフルーツほどの大きさだった腫瘍が、完全に消えていたのです。

6 ご覧の通り、その婦人自身は(癒しを)受け取ったと感じていなかったのです。けれども、神はご存じでした。

彼女が祈りの列を通り過ぎたとき、神はすでに列のこちら側で「何をすべきか」を語っておられたのです。

彼女が皿洗いをしていたとき、あるいは水に手を入れていたときだと彼女は言っていました、そのとき手を振ったそうです。

あれは神が語っておられたのです。

もしもその腫瘍が悪性になっていたら、彼女は死んでいたかもしれません。

しかし神は、彼女が死ぬことを望まれなかったので、彼女の心を動かし、ヴァンダリアへ行くよう導かれたのです。

さらに神は、彼女の夫の心も動かさなければなりませんでした。

私たちは神に色々なことを願い求めますが、時には神が応えてくださる時間を待たないことがあります。そうではありませんか？

例えば、神のいやしを信じない人でも、「ああ主よ、世界中の戦争を終わらせてください」と祈ることがあります。

でも、考えてみてください。

神のいやしの場合、一人の心を変えるだけで済むのです。

しかし戦争を終わらせるには、何百万もの人々の心を変えなければなりません。

ですから、それがどれほど大変なことか分かるでしょう。

神は、こちらの人、その人、さらに別のひと、あちらこちらで働かなければなりません。

けれども神のいやしの場合、働くのはたった一人——あなたの上だけです。それだけなのです。

だから、国際的な状況全体を変えるよう神に願うよりも、神のいやしを信じる方がずっと容易なのです。

7 とにかく、その婦人…神が彼女のご主人に語られました。

それで二人はそこへやって来ましたが、それは神のご計画だったのです。

私は彼女にこう言いました。

「もしあなたが、ただ信じさえすれば——あなたがこの列を通るとき、誰であっても——神は同じようにしてくださいますよ。」と。

そして私はこう言いました。

「…あの婦人は、この会場におられるのでしょうか？ 数分前、外で映画カメラで撮影をしておられましたが。婦人、ここにおられますか？ もしおられたら、手を挙げてください。」

「あの婦人は…どこですか？ ああ、はい、はい、ちょうどそちらに座っておられます。神があなたを祝福されますように。あの方が…さあ、もう一度立ち上がって、皆さんに見えるようにしてください。どれくらいになりますか？ あれは7年か8年ほど前でしたね、姉妹？ 腫瘍もなく、何もなく、すべてなくなって、完全です。」

「さあ、『主に感謝します』と言いましょ。ええ、主は本物です。」

8 では、何がそれを成し遂げたのでしょうか？

それは、その婦人の神への信仰です。そうです、その婦人の神への信仰こそが、それを成し遂げたのです。

なぜなら、イエスはすでにずっと前から彼女を癒やしておられたからです。そう信じませんか？

イエスがカルバリーで死なれたとき、何をされたのかを考えてみてください。イエスがカルバリーで死なれたとき、彼はすべての人を癒やされたのです。そうでしょう？

そしてカルバリーで死なれたとき、彼はすべての人を救われたのです。その後、罪人はいなくなりました。神の目から見れば、すべての人は救われたのです。

彼は、世の罪を取り除く神の小羊です。

では、あなたはこう言うかもしれません。「では、私はどうすればよいのですか？」

しかし、それを悔い改めて受け入れるまでは、何の益にもなりません。

もしそれを受け入れるなら、あなたはクリスチャンとして入って行くのです。

もし受け入れないなら、すでに自分で自分を裁いているのであり、裁かれる必要はありません。

もしあなたが憐れみを越えてしまえば、それはすでに裁きです。

神はすでにこう言われました。「その実を食べるその日、あなたは必ず死ぬ」と。

ですから、もう機会はありません。受け入れるか、神の御前に出るか、どちらかです。

9 そして、あなたは裁かれる必要はありません。なぜなら、すでに裁かれているからです。

神はかつてこう言われました。「その実を食べるその日、あなたは必ず死ぬ」と。

それで決まりなのです。

そして、あなたとその裁きとの間に立っておられるのは、ただイエス・キリストの血だけです。

ですから、私たちは今日、キリストにあつて自由であることを喜んでいます。

今週起こったことを思ってみてください。

全く見えなかった人が、視力を得ました。

耳が聞こえなかった人も、さまざまな癒しが起こりました。

私たちの主がなされたことです。

私たちは心のすべてをもって信じるべきではないでしょうか。

私はこう感じています——ボズワース兄弟、まるで新しい人間になって、これから奉仕に出ていくような気持ちです。これらのアメリカの集会の幾つかに戻って来たいとそう感じるのです。

10 昨夜お伝えしたように、本来なら今日の午後は宣教についてお話ししようと思っておりました。

けれども、少し時間が押してしまいましたので、今日は短いテーマを取り上げ、ほんのしばらくお話しして、それからすぐに次の集会へと進みたいと思います。

すぐこのあとにも礼拝が控えておりますからね。

今晚が、これまでで一番素晴らしい集会になることを心から願っています。

皆さんもそう願っておられるでしょうか？

そして今晚、ここにおられるすべての方が、神の御前で一人残らず癒されることを、私は信じています。

主は必ずそうしてくださると信じて、私はそれを待ち望んでいます。

そして明日、私たちはフロリダ州ウェストパームビーチへ向かい、次の集会に備えます。

見渡しますと、車椅子の方がお一人と、簡易ベッドの方がお一人だけ、残っておられるようです。

この午後、ここにおられる皆さんには「仰ぎ見て生きよ」と申し上げたいのです。

信仰を持っていただきたいのです。

そして、私がこのあと少しの間、神の御言葉についてお話ししている間、

どうか心のすべてをもって信じてください。

神が、あなたの信仰を奮い立たせてくださることを。

11 時々、私は思うのです……。

主は、私たちのことをどう感じておられるだろうか、と。

あれほど多くのことをしてくださっているのに、私たちはまるで半分眠っているかのように、じっと座っている——そうではありませんか？

これは、私自身も含め、皆が犯していることです。

私たちはただ座って、「主よ、何か私のためにしてくだされば…」と願うだけです。

けれども、主はすでにこれ以上ないほど、すべてをしてくださったのです。

すでに私たちを癒してくださり、救ってくださり、喜びを与えてくださり、平安を与えてくださいました。

主は私たちの盾、私たちの守り、そして持っているすべてのものの源です。

神の御子・御娘として私たちを贖い戻すために、その代価はすでに完全に支払われています。

ただ一つ、この世でまだ成し遂げられていないことがあります——それは「肉体の死」です。

私たちは皆、死を通らねばなりません。

なぜなら、それが神が私たちを故郷へと迎える唯一の道だからです。

私たちが天の家へ帰るために通る道は、ただ死を経るほかありません。

けれども、死以外のすべてはすでに主の御足の下に置かれています。

そして死でさえ、その刑罰はすでに取り除かれました。

今や私たちは、死を経てただちに主の御前へ入り、やがて再び戻ってきて、不滅のからだに変えられ、この地上でイエス・キリストと共に千年の間、生き続けるのです。

アーメン。私はこれを信じています。

私は確信する千年王国信仰者です。

歴代のヘブルの預言者たちが語った、あの黄金の時代——千年王国——が来ることを信じています。

そして私たちはそこで、主と共に千年間、この地で治めるのです。

12 世の中には、「後千年王国説」や「前千年王国説」、あるいは「千年王国など存在しない」という立場があります。

もしあなたが「私は全く信じません」と言っても——それでも私たちは兄弟です。兄弟であることには変わりありません。

けれども私は、やはりその御国の支配が来ると信じています。

神が…本当はもっと時間をかけてお話ししたいのですが——今日の午後に触れたように——神がどのようにご自身を展開し、そして再びたたみ込まれるか、そのことをお伝えしたいのです。

神は、時の初めよりも前に、ご自身を大いなる「何もない」中から現され、ロゴスへと、そして人へと展開されました。

そして昨夜お話ししたように、神は人を通してご自身を表されてきました。

火の柱から御子へ、そして御子から人へと——なんと驚くべきことでしょう。

さらに、その人が死から、そして死の刑罰から救い出されるまでの道——

罪によって下った人が、義化を通り、聖霊のバプテスマを受け、この死ぬべき体から、初めの姿のように不滅の姿へと戻されること——そして再び肉体を持つようになること。

それは、神が初めに人を造られたときと同じで、食べ、飲み、共に生きるためなのです。

ああ、なんと素晴らしいことでしょう。

- 13 人は、この今の肉体の人となる前、「霊の人」だったのです。

神は最初の人を御自分のかたちに造られました——そうですね？

では、神のかたちとはどのようなものでしょうか？

神は霊です。そうですね？

ですから、神はまず霊の人を造られ、その後に肉の人を造られたのです。

そして神は、人が地上の住まいと関わることができるよう、五感を与えられました。

もしかすると、猿のような手や熊のような足を与えられたのかもしれませんが——それは分かりません。

けれども、それは神のかたちではありませんでした。

神は霊でおられるからです。

しかし、その神が人のかたちを取って地上に来られました。

それは、人を御自身のもとに贖い戻すためです。

神は肉となられ、私たちの間に住まわれました。

そして私たちは、この贖われた命から、そのまま不滅の命へと入り、超自然のからだを与えられ、

さらに再び肉体を持つようになるのです。

そうして私たちは、まるでエデンの園に連れ戻されるかのように——

初めと同じ状態へと帰るのです。

- 14 想像してみてください——あの朝の美しさを。

アダムがエバの腕を取り、園の中をゆっくりと歩いていったあの時のことを。

ああ、なんと美しい光景だったでしょう。

大きな鳥たちが空を舞い、そこには平和があり、病もなく、死もない。

エバは美しく見せるために、顔に何か塗ったりする必要など一度もありませんでした。

——あ、今ちよっと笑った方がいましたね。

なんと呼ぶのでしょうか、あれは。とにかく顔に塗るあの「化粧」のことです。

あれは…いや、マニキュア？ それは髪ではなく爪でしたね。

まあ、なんであれ、とにかくそういう類のものです。

(話せば話すほど混乱してしまいますね。)

忘れられないのは、ある時、妻に靴下——いやストッキングを買いに行かされた時のことです。

後ろに一本のラインが入った、ちよっと特徴のあるデザインのものを頼まれました。

種類は二つあって、「シフォン」と「レーヨン」。

たしかシフォンのほうが良いのですよね？ 女性の皆さん、そうですね？

それで私は町を歩きながら大声で「シフォン、シフォン、シフォン、シフォン！」と叫んでいましたら、

誰かが「やあ、ビリー!」と声をかけてきたのです。

15 それで私は、

「やあ、やあ。シフォン、シフォン、シフォン、シフォン、シフォン、シフォン!」と繰り返していたのです。

すると誰かが釣りの話をし始めたので、私はすっかり本来の用事を忘れてしまいました。

それで、昔よく知っていた女の子の店に行き、

「やあ、テルマ」と声をかけました。

彼女は「やあ、ビリー。何をお探し?」と聞きました。

私は「ホープが靴下を欲しがってるんだ」と答えました。

すると彼女は笑って、

「ホープは靴下なんて履かないわよ」と言いました。

「いや、履くんだよ」と私。

「失礼だけど、彼女が履いてるのは靴下じゃなくてストッキングよ」と彼女。

「そう、それが欲しいんだ」と私は言いましたが、

(うわ、無知をさらしてしまった…)と心の中で思いました。

そこで、彼女が種類を言ってくれるのを待って、

「どんなのがあるの?」と聞き返しました。

すると彼女は「そうね、レーヨンがあるわ」と答えたのです。

16 私はすぐに「それが欲しい」と言いました。

ああ、その時は種類が二つあるなんて知らなかったのです。

「それがいいんだ。後ろに一本ラインが入ってるやつ、それだよ」と言いました。

彼女はそれを出してくれました。

本当は60セント払うはずだったのですが、20セントで手に入ったのです。

「じゃあ、それを二つか三つください」と頼みました。

家に帰って、私は得意げにホープに言いました。

「ねえ、見てごらん。僕はアブラハムの子孫だ、ちょっとユダヤ人気質なんだよ。

どうやって得をするか、ちゃんと知ってるんだ。

ほら、君たち女性はルイビルまで行って、一日中バーゲンを探し回って、

帰ってくる頃には全部お金を使ってしまって、結局大した掘り出し物はないだろう?

でも僕は町にちょっと行って、ストッキングを三足、一足分の値段で買って来たんだ。」

すると彼女はこう言いました。

「シフォンは得たの?」

17 私は「ええ、もちろん」と答えました。

けれども実のところ、シフォンとレーヨンの違いなんて知りませんでしたし、私には同じように聞こえて

いたのです。

しばらくして、ホープは別のストッキングを買ってきました。

どうやら私は間違ったものを買ってしまったようで……。

それで私は、「この手のことはもう女性に任せたほうがいい」と心の中で思ったのです。

顔や髪に使うあれこれ——ああいうのは、やっぱり女性たちの領分ですね。

——さて、主を愛しておられる方はどれくらいいらっしゃいますか？

「アーメン」と言ってみてください。

では、少し御言葉を読み、その御言葉について語り合しましょう。

ほんの短い時間ですが……。

私はこれまでも何度も言ってきましたが、私はいわゆる説教者ではありません。

ただの古き良き田舎育ち、昔ながらの素朴な信仰を持った者です。

空より青く、罪を打ち砕く——あの昔ながらの信仰。

あなたはそれを信じますか？

それなら、私たちはきっと心をひとつにできるでしょう。

18 私は、この信仰は「上辺を白く塗る」のではなく、「本当に白く洗い清める」ものだと信じています。

罪からあなたをきよめ、心をまっすぐにし、曲がったところをすべて取り除き、

曲がりくねった道から栄光の大通りへと導くのです。

そうではありませんか？

もちろんそうです。天の喜びの鐘が鳴り響き、あなたは毎日御霊のうちを歩むのです。

「～に属している者には、罪に定められることがない」と聖書は言います。

それは教会に名前を連ねている者のことではありません。

握手を交わした者のことでもありません。

ただ水のバプテスマを受けた者のことでもありません。

「キリスト・イエスにある者には、罪に定められることがない」のです。

では、どうやって「その中に」入るのでしょうか？

——「私たちは皆、一つの御霊によって、一つのからだにバプテスマされる」のです。

そうですよね？

19 ヨハネによる福音書 第11章からお読みします。

18節——

「さて、ベタニヤはエルサレムに近く、およそ十五スタディオン(およそ三キロ弱)の距離であった。

そして多くのユダヤ人が、マルタとマリヤのもとに来て、兄弟のことで彼女たちを慰めていた。

マルタは、イエスが来られると聞くや、急いで迎えに行った。

しかしマリヤは家に座っていた。

マルタはイエスに言った、

『主よ、もしあなたがここにおられたなら、私の兄弟は死ななかつたでしょう。

けれども、今でも私は知っています。あなたが神に求めることは何でも、神はあなたにお与えになると。』

イエスは彼女に言われた、

『あなたの兄弟はよみがえります。』

マルタは言った、

『終わりの日の復活の時によみがえることは存じています。』

イエスは言われた、

『わたしは、よみがえりであり、命です。

わたしを信じる者は、たとえ死んでも生きるのです。

また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことはありません。あなたはこれを信じますか。』

彼女は言った、

『はい、主よ。私は信じます。あなたはこの世に来られるはずの神の子、キリストです。』

——では、しばし頭を垂れ、祈りましょう。

## 20 天の父よ、

いまお読みしたこの短い御言葉を、どうかこの午後、祝福してください。

そしてそれぞれの心に正しい場所を与え、また私の唇にも正しい言葉を置いてください。

それによって、あなたの御名があがめられ、聞く人々に信仰が与えられますように。

なぜなら「信仰は聞くことによって」来るからです。

どうか、今晚の集会を待たずとも、この午後のうちに、病んでいる人、足の不自由な人が一人も残らず癒されますように。

罪人は救われ、背を向けた者は立ち返りますように。

この礼拝からあなたが栄光を受けられますように。

このことを主イエスの御名によって祈ります。アーメン。

——では、しばらくの間、この箇所を共に見てまいりましょう。

どうか私と共に祈る心で聞いてください。

そして、今晚の集会に十分間に合うよう、時計を見ながらお話しします。

今日お話ししたいのは——

ラザロが墓からよみがえらされた時、彼はどのようによみがえったのか、その方法です。

彼はどのようにして墓から出てきたのでしょうか。

## 21 さて、まずこの出来事の背景をしっかりと見ていきましょう。

どうか、今しばらく私と共に祈る心を持ち、心を傾けて聞いてください。

私は「よみがえり」を信じます。

肉体的・現実的なよみがえりを信じます。

そして、イエス・キリストが肉体をもって再び戻って来られることを信じます。

また、教会は今、地上におけるキリストの代表であると信じます。

教会はイエス・キリストの血によって洗われています。

教会は聖霊に満たされた群れであり、徹底して聖さを宣べ伝えるべきです。

——そう思われませんか？

聖書を思い起こす時、罪のためのいけにえとして二羽の山鳩が用いられました。

また、ツアラアト(らい病)のきよめにもそれが使われました。

聖書においてツアラアトは、罪の象徴でした。

二羽の鳩のうち、一羽はその首をねじ切られ、

その血をもう一羽の生きている鳩に受けさせます。

そしてその生きている鳩を窓辺から放ちます。

生きた鳩は翼を羽ばたかせながら飛び立ちますが、

その翼や身体には、死んだ仲間の血が滴り落ちていました。

その血が地に散り落ちるたび、まるでこう叫んでいるかのようにでした——

「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、主にあれ。」

22 なんと完全な型でしょう——それは教会そのものです。

イエス・キリストは、神が人となり、罪深い肉のかたちを取って地上に来られ、

カルバリで殺され、十字架につけられました。

そして、その「死んだ仲間」の血が、生きている花嫁である教会に注がれたのです。

教会は翼を羽ばたかせながら前へ進み、

その上にはイエス・キリストの血があり、こう叫んでいます——

「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、万軍の主なる神。」

これはツアラアト(らい病)の完全なきよめの型です。

ツアラアトには当時、治療法はありませんでした。

そして今も、人間の手では治すことができません。

神だけがそれを癒すことができるのです。

それは罪の象徴でもあります。

静かに、痛みもなく、気づかぬうちに忍び込み、

気がついた時には死が迫っています。

体中に白い斑点が現れ、手足が腐り落ち、

体を内側から食い尽くしていく——それがライ病なのです。

そして、イエスだけがこのライ病を癒すことがおできになりました。

今もまた、罪というこのライ病を癒すことができるのは、  
イエスおひとりだけなのです。

23 さて、イエスのご生涯の始まりにおいて――

イエスはあまりにも偉大なお方で、この地上に彼のような方はかつて存在せず、これからも現れることはありません。

イエスは、全能の神の「ひとり子」です。

私たちは、彼を通して養子として神の子とされました。

けれども、彼は「神のひとり子」なのです。

アダムもまた神の子でした。そう信じますか？

彼は「神の創造された子」でした。

しかし、イエスは「神の産み出されたひとり子」です。

神ご自身が御子をお生みになったのです。

これは血のしくみとよく似ています――

血の源は父から来ます。

母は子を宿し、育むための器であり、

母の血は子どもの血とは直接関係がありません。

子は母の胎内で育まれますが、

その血は一滴たりとも母から受け継ぐのではなく、父から受け継ぎます。

そして、命は血の中にあるのです。

24 ここにいる多くの方々は農家の方でしょう。

家畜や鶏を育てておられる方もいると思います。

鶏を見てください。

雌鶏は卵を産むことができます。

しかし、そのために必ず雄鶏と交わる必要があるわけではありません。

雄がいなくても卵は産めますし、見た目も大きさも卵には

変わりありません。

けれども、その卵は決して孵化しません。

ただそこに置かれたまま、やがて腐ってしまうのです。

卵を温めても、もし受精していなければ、雛は生まれません。

なぜなら、その卵には血がないからです。

血は雄から来るのです。

たとえ雌鶏が巣に座り続け、あまりにやせ細って立ち上がれなく

なるまで温めたとしても、

その卵が無精卵なら孵ることはなく、腐ってしまうだけなのです。

25 私はよくこう言うのです——これは、今日の教会の姿とよく似ています、と。

私たちは、敬虔なかたちをいくらでも持てます。

礼拝に行き、十分の一献金をささげ、模範的な教会員として振る舞う——

けれども、兄弟姉妹、それだけでは何も変わりません。

キリストという「花婿」と真に出会い、生まれ変わらなければ、

巢の中は腐った卵でいっぱいになるだけです。

古い教会は、やせ衰えるまでその卵を抱き続けるかもしれません。

けれども、それは「教会主義」にすぎません。

はっきり言います——

人が新しく生まれなければ、何の益もなく、

そして命が吹き込まれなければ、新しく生まれることはできません。

ここで、神のご計画を見てみましょう。

神は「雄」の役割としてイエス・キリストをこの地に送られました。

しかし、神は霊ですから、そこには性的な関係も欲望もありません。

もしそうであれば、イエスは処女降誕ではなくなってしまうます。

神は霊であられ、マリヤを覆い、その胎内に御子の血の細胞を創造されました。

その血こそが神の御子を生み出したのです。

そして、この聖なる血を通して、私たちは命にあずかります。

私たちの肉の血は退けられ、

その代わりに、罪のための贖いを成すイエス・キリストの血が与えられたのです。

なんと美しい光景でしょう。

あなたはこれを信じますか？

救われているなら、必ず信じるはずですよ。

これ以外のことを受け入れて救われることはできません。

ただイエスだけが、処女から生まれた神の御子なのです。

全能の神が女性を覆い、その女性は男性を知ることなく、

神がその胎内に、この命の細胞を創造されたのです。

26 少し前のことです。

たしかアッカーマン博士——もし間違っていなければ、今日もここにおられますが——と私は山奥に行ったことがありました。

その時、完全な不信者が私のところに来て、議論を挑んできたのです。

彼はその地の牧場主で、「処女降誕なんてあるわけがない。

そんなものは全くナンセンスだ。どの時代にもあるような、ちょっとした出来事だっただけだ。

ヨセフがああ赤ん坊の父親だったんだ」と言いました。

私はきっぱりと言いました。

「違います。ああ赤ん坊の父は神です。」

すると彼はさらに言いました。

「そんなことはありえない。科学的研究にもまったく反している。

どうもろこしでさえ、雄と雌が自然に交わらなければ実を結ばない。

女が男と関わることなく赤ん坊を産むなんて、絶対にありえない。」

27 私は彼にこう言いました。

「あなたは信じているんですか……」

その人は直前まで、こんなことを私に話していました——

最初の間は海綿から始まり、それがオタマジャクシになり、

それからカエルになって、また別の何か(オタマジャクシだとか……)になり、

やがて火を吹くドラゴンになって、最終的にサルになり、

そこにカラーとネクタイを付けたら人間になったのだ、と。

私は心の中で、「なんというナンセンスだ」と思いました。

皆さんも思い出してください——ダーウィンの倫理学を読んだことがありますか？

あれは全くおかしい話です。

そして、こちら側の地域では、それを学校で教えることを許しているのです。

これはキリスト教の弱さの一つです。

彼らはこう言うのです——

小さなオタマジャクシが何千年も片方の肩で地面を這い続け、そこに小さなコブができ、そこから腕が生えた。

次に、その肩で這うのをやめ、反対の肩でまた何千年も這い続け、もう一つコブができ、そこからもう一方の腕が生えた——と。

馬鹿げています。

ああ、なんとまあ。

もしそんな話を信じられる人がいるなら、私はそこまでの「信仰心」は持っていません。

私はただ、神が言われたことを信じます——それで十分です。

それ以上のことは要りません。

むしろ、その進化論を信じるほうが、よほど大きな「信仰」が必要でしょう。

私はただ、神が人を創造されたと信じます——それだけです。

それで私は彼にこう尋ねました。

「では、あなたはイエスに母親はいたが、父親もいたと信じているのですね？」

彼はこう答えました。

「はい、その通りです。」

28 私は彼にこう言いました。

「では、ひとつ聞かせてください。最初の人間はどこから来たのですか？ そしてその父親と母親は誰だったのですか？」

あなたの科学の理屈では、必ず父と母がいなければならないはずですよ。

では、その最初の人間の父と母は誰なのですか？

たとえあなたの言うようにサルやオタマジャクシや海綿だったとしても、あなたの説に従えば、やはり父と母が必要です。」

彼は今日に至るまで、その問いに答えたことがありません。

そして、答えることもできないのです。

いいですか、皆さん。

世の中には、あまりにも視野の狭い人がいます——

目と目の間に鉛筆を一本置いたら、それだけで視界がふさがれてしまうほどに。

本当のことです。

彼らは結論を急ぎ、何でも飛びついてしまい、

立ち止まってしっかり吟味することをしません。

しかし、これと比べてみななければなりません——

世界で唯一、完全に科学的な書物、それがこの本です。

これこそが、あなたがどこから来たのか、あなたは誰なのか、そしてどこへ行くのかを教えてくれる唯一の書物です。

存在するすべての書物の中で、この聖書だけがそれを語ります。

そして私は、その一言一句を信じます。

書かれている通りに、ありのまま信じます。

私はいつでも、自分の魂をその御言葉のどの部分にも委ね、

「主はこう仰せられる」と胸を張って言う用意があります。

ええ、そうです。

29 少し前のことです。

ある若者が学校に行き、学ぶ必要のないことをたくさん学んで帰ってきました。

私は、学校や教育、神学校そのものに反対しているわけではありません。

しかし、神が召された説教者を神学校に入れると、

まず最初に、彼の中にあつた神からのものを全部抜き出してしまい、

代わりに神学的理論を詰め込んで、そのまま送り出すのです。

すると、入る前よりもずっと悪い状態になってしまう——これは本当のことです。

皆さん、私はここへ神とそのみわざについて語るために来ています。

ですから、木の根元に斧を打ち込み、あとは木くずがどこへ飛ぼうと構いません。

そうしなければならないのです。

兄弟姉妹、これは真実です。

彼らは神が注いだものをくみ出し、死んだものを注ぎ込んでしまいます。

まるで大きな死体安置所のようなもので、冷たく、死んだような場所——

霊的な温度計なら氷点下90度のような寒さです。

死体安置所では、死んだ人に何かを注射して、そのまま死んだ状態を保たせます。

まさにそれと同じです。

命となるものを全部抜き出し、死をもたらすものを注ぎ込んでしまう——

彼らを死んだままにしてしまうのです。

ああ、なんと悲しいことでしょう。

さて、この話の中のある年配の女性が病気になり、肺炎を患いました。

医者は「助からない」と言い、息子呼び戻すように言いました。

その時、聖霊に導かれた小柄な女性——小さな聖霊の器がやって来て、こう言ったのです。

「あなた、神の癒しを信じますか？」

その婦人はこう答えました。

「そんなこと、一度も聞いたことがありません。」

30 その小さな聖霊に満たされた婦人は言いました。

「聖書には、『病人に手を置けば、癒される』と書いてありますよ。」

すると病床の婦人は、すぐにそのことをもっと知りたくなりました。

そこでその婦人は言いました。

「じゃあ、私の牧師に来てもらって祈ってもらってください。」

フルゴスペルの牧師がやって来て、その婦人のために祈りました。

そして祈ったとき、神が彼女を癒されたのです。

それから数週間後、息子が帰ってきました。

「母さん、不思議だなあ」と彼は言いました。

「どうやってそんなに早く良くなったんだい？」

31 彼女はこう言いました。

「まあ、話したいことがあるのよ。あのね、前によく牛乳を売りに来ていたあの婦人、覚えてる？ あの人は、あそこの小さな“ホーリーローラー”の集まりに行ってるの。あの人たちは神の癒しを信じているのよ。

それでね、その牧師さんがここに来て、マルコ16章を読んでくれたの。“信じる者にはこのようなしるし

が伴う。病人に手を置けば癒される”って。そして私のために祈り、油を塗り、手を置いてくれたの。そうしたら、主が私を癒してくださったのよ。ああ、主の御名をほめたたえます！」

すると息子は言いました。

「母さん、そんなばかな。あんな連中と関わっちゃいけないよ。そんなことしてたら、母さんまであの人たちみたいに振る舞うようになるじゃないか。それは恥ずかしいことだよ。」

彼女は言いました。

「でもね、あの人は聖書から読んでくれたのよ。」

息子は答えました。

「母さん、神学校で習ったんだ。マルコ16章の9節以降は靈感を受けてないって。」

すると彼女はこう叫びました。

「まあ、ハレルヤ！」

息子は驚いて言いました。

「母さん、どうしたんだい？何を言ってるんだい？」

32 彼女はこう答えました。

「だってね、こう考えたのよ——靈感を受けていない御言葉でさえ、主は私を癒してくださったのなら、靈感を受けた御言葉なら、なおさらどれほどのことをしてくださるでしょう！って。どれだけもっと力があることでしょう！」

——その通りです。

もし“靈感を受けていない”と言われる御言葉でさえそれができたなら、

本当に靈感を受けた御言葉は、なおさら力強く働くはずですよ。

だからこそ、皆さん、これは真実ですよ——

「イエス・キリストは、きのうも、きょうも、いつまでも同じ方」ですよ。

その生涯を世界に示されたとき、私たちは主の生涯を振り返り、

ほんの少しの間、その生き様をたどることができます。

神はエデンの園で、御子を遣わすと語られました——そう信じますか？

神はこう言われました——

「女の子孫と蛇の子孫との間に敵意を置く」と。

そして、それはキリストにおいて成就したのです。

33 さて、イエスが来られる前——

神が何かをなさろうとされる時には、必ず裁きの前に憐れみを送られます。

いつも、裁きの前に警告を与えられるのです。

しかし、人がその警告を無視するなら、残されるのは一つ——それは裁きですよ。

そうです。

イエスが言われた通りですよ——

「もしあなたがたが罪のうちに死ぬなら、わたしのいるところに来ることはできない。」

神は説教者を遣わし、あらゆる方法で警告を与えられます。

御霊を遣わし、人々に注意を促されます。

そして、御子イエスを遣わす前にも、人々にその到来を備えるよう警告がなされました。

——ここで少し立ち止まり、心から申し上げたいのです。

私は、今世界中で起こっている出来事こそ、警告だと信じています。

イエスが来られるのです。

たとえば韓国では、メソジストもバプテストも関係なく、力強いリバイバルが起こっています。

聖霊を受け、異言を語り、癒しの礼拝が行われ、神のみわざが次々と起こっています。

兄弟姉妹、圧迫がやってくると、人は神に近づくものです。

その時、「自分はメソジストかバプテストか」などと気にしている暇はありません。

ただ祈り始めればいいのです。

あとのことは神がなさいます。

あなたはただ祈って、神に近づきなさい。

34 ある宣教師が最近帰国して、私にこう話してくれました。

彼はある集まりに行き、「あの人たちはみんなペンテコステ派ですか?」と尋ねたそうです。

すると答えはこうでした——

「いや、この中にペンテコステ派は一人もいないよ。」

「でも、みんな異言を語り、声をあげて賛美しているじゃないですか。」

「はは、あれは圧迫が彼らをそこに押しやっただけだよ。」

その通りです。心配しなくても、神がそれをなさいます。

神ご自身が、人々をその所に押し込まれるのです。

私たちはつい、「この教会は私たちのもの」「あの教会は私たちのもの」と考えがちです。

けれども、ソロモンが神殿を建てたときのことを思い出してください。

その石材は世界中のあちこちから切り出され、運ばれてきました。

ある石はこう向き、別の石はあちら向き——

しかし、神殿が組み立てられていく間、のこぎりの音も、金槌の音も、四十年間一度も響きませんでした。

すべての石が、ぴたりとあるべき場所にはまり、神殿は完成したのです。

35 そして、それこそが主イエス・キリストの再臨の時の姿なのです。

「心のきよい者は神を見る」——そうです!

けれども、私たち「建てる者」がなかなか前進できない理由は、昔と同じです。

当時も「要の石」が捨てられたのです。

そして今日も同じことが起きています——

メソジストも、バプテストも、ペンテコステも、皆が共通して、  
要の石であるイエス・キリストを退けているのです。

私たちは神学や教義にばかり目を向け、  
「私たちの教会はこう信じる」「これは信じない」と議論し、  
それを教え込み、押し込みます。

けれども——

聖霊のバプテスマと神の力、  
すなわち人々の間に自由をもたらすその力が、退けられているのです。

しかし、それこそが、  
イエスにお会いするために天の故郷へ帰る教会を建て上げる「要の石」なのです。  
ハレルヤ!

私はこれを信じます。

36 要の石は、雑草の中に蹴り捨てられてしまっています。

人々は教会を建て、さらにまた教会を建てましたが、  
結局、ある部分が作り残されていて——

そこにぴたりとはまるのが、その要の石だったのです。

そして今日も同じです。

神の力、しるし、不思議がすっかり置き去りにされてきたその場所に、  
聖霊がぴたりとはまるのです。

なぜなら、聖霊こそが神の力を教会に運んで来られるお方だからです。

アーメン。

神はいつも警告を送られます。

イエスが来られる直前にも、天から御使いガブリエルが遣わされました。

小さな御使いならばしばしば遣わされます。

そうです、御使いは今も存在します。

聖書によれば、すべての人には守護の御使いがついています。

イエスはこう言われました——

「彼らの御使いは、天におられるわたしの父の御顔をいつも仰いでいる」。

37 少し前のことです。

ある牧師が私にこう言いました。

「ブラナム兄弟、天使を見るなんてことはありませんよ。天使が教会を導くことはありません。教会を導くのは聖霊です。」

私は答えました。

「それはその通りです。けれども、天使という存在は今も変わらずいます。

彼らは、神の御前から遣わされる奉仕の霊なのです。」

すると彼は言いました。

「私たちの教会は、そんなことは信じていません。」

私は答えました。

「私はあなたの教会が何を信じているかは知りません。

しかし、聖書が何を教えているかは知っています。」

彼はさらに言いました。

「天使はダニエルの時代やそれ以前にはいたかもしれませんが、

聖霊が来られてからは、もう天使はいません。」

そこで私は聞きました。

「では、ピリポは聖霊を受けていたと信じますか？」

彼は答えました。

「もちろんです。」

- 38 「では聞きますが——あ のとき、大きなリバイバルのただ中にいたピリポに、  
“そこを離れて荒野へ行き、エチオピアの役人に会いなさい”と告げたのは誰でしたか？  
聖霊ですか？——いいえ、そうではありません。

主の使いが来たのです。」

その通りです。ピリポは確かに聖霊を受けていました。

では、ペテロはどうでしょう？

ペテロが聖霊を持っていたと信じる方はどれくらいおられますか？——皆さん、そうですね。

では、そのペテロが牢に入れられ、翌朝には首をはねられるという夜のことを思い出してください。

そのときヨハネ・マルコの家では祈り会が開かれていました。

誰がそこに現れたのですか？

光が差し込み、彼の上に輝き、彼に触れて立ち上がらせ、鎖を外し、

扉を開いて通りへと導き出したのは——主の使いでした。

その通りです。ペテロも聖霊を持っていました。

また、あの大聖徒パウロはどうでしょう。

十四日十四晩、月も星もなく、救われる望みはすべて絶たれた嵐の中で、

彼は船底に降りて祈りました。

そして戻ってきてこう言ったのです——

「だから、元気を出しなさい。私が仕えている神の御使いが、昨夜、私のそばに立ってこう言われたので

す——

“パウロよ、恐れるな”と。」

そうです、それは神の御使いでした。

39 パトモス島をご覧ください。

黙示録の全巻は、御使いによってヨハネに示されました。

「わたし、イエスは、わたしの御使いを遣わして、間もなく起こることをあなたに示した」——そう書かれていますね？

ヨハネはその御使いを拝もうとしましたが、真の御使いは決して拝まれることを許しません。

「神を礼拝せよ」と言うのです。

その通りです。偽りの天使も確かにいます。

ちょうど偽りの霊がいるように。

しかし、真の神の御使いは、必ずあなたをイエス・キリストへと指し示します。

そうです。

パウロもこう言いました——

「たとえ天から御使いが来て、あなたがたがすでに聞いた福音と違うことを宣べ伝えるなら、その者はのろわれるべきです」と。

その通りです。

ですから、その御使いが何を教えるのか、必ず確かめるのです。

もし、その教えが福音と一致し、健全な教理であり、すべて聖書にかなっているなら、それを信じなさい。

神はいつも、御使いを遣わして世界に警告を与えられます。

私は、今日も地上に御使いがいて、来たるべき裁きを世界に警告していると信じています。

——この「空飛ぶ円盤」の話にも少し触れたいところですが、今日はそこまで時間を取らないことにします。

ともかく、思い出してください——

ソドムとゴモラの滅びの前に、神は御使いを遣わし、ロトを呼び出されたではありませんか！

そうですよね？

40 見てください——義なるお方、神の大いなる御子が来られる直前、

神は御使いを遣わされました。

その御使いが訪れたのは、尊敬される家でした。

もしあなたが御使いに自分の家を訪れてほしいなら、ザカリヤの家のようにでありなさい。

ザカリヤと妻エリサベツは、主の御前に正しく歩み、

主のすべてのおきてと命令を守り、

与えられた御言葉と光に対して完全な従順をもって生活していました。

ザカリヤの務めは、人々が祈っている間、祭壇で香をたくことでした。

そして彼が香をたいていると――

祭壇の右側に、大天使ガブリエルが立っていたのです。

御使いは様々に遣わされますが、もしガブリエルが来たと聞いたら、心の備えをなさい。

何か重大なことが間近に迫っているのです。

ガブリエルはイエスの最初の到来を告げました。

そして、ガブリエルはイエスの再臨も告げるのです。

その通りです。

41 よくご覧ください。

ガブリエルはザカリヤのもとに来て告げました――

彼は年老い、妻も長年子どもを願って祈ってきました。

しかし今日を見ると、何と大きな違いでしょう。

国の現状は恥すべきものです。

人々はこの国を汚しています。

ある人が私にこう聞きました。

「ブラナム兄弟、共産主義がアメリカを支配すると思いますか？」

いいえ、そうは思いません。

私を脅かすのは共産主義ではなく、

私たち自身の内にある腐敗こそが、この国を滅ぼそうとしているのです。

リンゴを傷めるのは外からつつくコマドリではなく、

芯に潜む虫がリンゴを腐らせるのです。

そして今、私たちの中にある道徳の崩壊――

女性たちがタバコを吸い、ウイスキーを飲み、

夜な夜なバーが人で溢れ、汚い言葉を吐き散らす――

これこそが私たちが滅ぼしているのです。

さらに、周囲の教会が「敬虔なかたち」を持ちながら、その力を否定している――

それこそが私たちが滅ぼしているのです。

アーメン。まさにその通りです。

42 そこに立っていたザカリヤに、ガブリエルはこう告げました。

「この務めの日々が終わったら、家に帰りなさい。

あなたの妻はみごもり、男の子を産むでしょう。

その名をヨハネと呼びなさい。」

しかし、このザカリヤの態度を見てください――

人の心がどれほどかたくなになれるかが分かります。

彼には、信じるに十分な前例がありました。

ハガルのことも、サラのことも知っていたはずです。

サラは百歳で子を授かったのです。

それなのに、ザカリヤはこう言いました。

「そんなことはありません。私の妻はもう年を取りすぎています。」

するとガブリエルは言いました。

「私は神の御前に立つガブリエルです。

私が語ったことは、その定められた時に必ず成就します。

しかし、あなたはこの子が生まれる日まで口がきけなくなるでしょう。」

43 ああ、なんということでしょう！

神が語られるとき、その言葉は天に記録されます。

そして必ず実現するのです！

どんなに不思議に思えても、どんなに理屈に合わなくても、

神がそう言われたなら、必ずその通りになります。

「わたしの言葉は、その定められた時に必ず成就する」のです。

人々は、ザカリヤがなかなか出てこないのを見て、不思議に思いました。

やがて彼が出てきましたが、口がきけなくなっていました。

彼は身ぶりで人々に合図をしてその場を離れ、家に帰りました。

そして、妻は身ごもり、しばらくの間身を隠しました。

それからおよそ6か月後——

ここから少し劇のように描いてみましょう。

場所はナザレ。

それは、エバンズビルよりもはるかに邪悪な町——

おそらく世界で最も悪い町でした。

けれども、そんな町にも一人の若いおとめが住んでいました。

町がどれほど悪に満ちていても、

まわりの娘たちや男たちがどんな行いをしていようとも——

あなたは、どこにいてもクリスチャンでいることができるのです！

44 さて、ご覧ください——

私はその若いおとめが「乙女の泉」へ向かって歩いて行くのが見えます。

(もし主が許してくだされば、私は数か月以内にそこを通りたいと願っています。)

彼女は大きな東洋風の水がめを頭に載せ、

水を汲んで戻ってきます——ちょうど洗濯の日です。

私にとって、家の中で一番嫌いな日は「洗濯の日」でした。

今は電気洗濯機がありますが、それでも家で洗濯の日が来るのはあまり好きではありません。

昔、私の母はケンタッキーで、裏庭に置いた古い大釜を使っていました。

——あの釜を覚えている方はいますか？

(おお、やはり田舎の方々は分かりますね。)

よし、ではネクタイを外しましょう——家にいる気分です。

兄弟姉妹、あの古い釜を覚えていますか？

私はよく薪を割って運び、その釜の下にくべました。

そして服をその中で煮るのです。

あの頃は手作りの灰汁(あく)を使って石けんを作り、

洗濯板でゴシゴシとこすって洗っていました。

本当に汗だくになる一日でした。

#### 45 思い出します——

秋になると、近所の人々がやってきて、その釜を借りてジャムや保存食を作ったものでした。

皆さんも覚えていますか？

私はよく、その保存食作りを手伝わされました。

あるとき、古いイナゴマメの柱や、古い柵の板を割って薪にし、

火力を上げようとしたことがあります。

もう十分熱くなって、瓶詰めにできると思ったのです。

あの小さな黄色いトマト——ひょうたんトマト——

今でも、あれを熱々のビスケットに挟んで、

昔ながらの白いカントリーバターをのせれば、本当に美味しいでしょうね。

ええ、間違いなく最高のご馳走です。

母は大きな釜いっぱいに入れて煮込み、

私はその下にくべる薪を割っていました。

「お母さん、もう十分熱いよ」と私が言うと、

母は「いいえ、もっと熱くしないとイケないのよ」と答えました。

私は首をかしげて、

「どうしてもっと熱くしないとイケないの？」と尋ねたものです。

#### 46 母はこう言いました。

「もっと熱くして、ポンツ、ポンツ、ポンツと音を立ててはじけるくらいにしないとイケないのよ。そうになったら甘くなってくるの。」

「だから、どんどん薪をくべなさい。そのうち十分甘くなるから。そうやって全部の汁と味が混ざり合い、

糖分が全体に行き渡って、瓶詰めのできる状態になるのよ。」

私は心の中で思いました——

これはまるで昔ながらの聖霊の集会と同じだな、と。

兄弟よ、福音という薪をどんどんくべ続けるのです。

そして十分熱くなったら、証しが次々と飛び出す——

ポンツ、ポンツ、ポンツ、ポンツ——そんな集会です。

そうして悪魔が全部追い出され、聖霊が人々の間を行き来し、

みんなが甘く、柔らかくされていく。

そこから、昔ながらのリバイバルが始まるのです！

だから、どんどん薪をくべて、思い切り息を吹き込み、扇ぎなさい。

あとのことは神がなさいます。

そうすれば、保存食(魂)も甘く仕上がり、

瓶詰めにしてしっかり保存できるのです。

ええ、まさにその通りです。

47 私は思い描きます——

ガブリエルが祭司ザカリヤに語り、彼が家に帰ってから約六か月後のことです。

マリヤが水がめを頭に載せて道を歩いていました。

すると、道の正面から天からの大きな光が差し込みました。

その光の中に、大天使ガブリエルが現れ、こう言いました。

「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられます。」

そのあいさつは、若いおとめを少し驚かせました。

彼女は思わず身を引き、何が起きたのか分かりませんでした。

けれども、そこには大天使ガブリエルが立ち、彼女に語りかけました。

彼は、ザカリヤの妻であり、マリヤのいとこであるエリサベツのことを告げました。

ヨハネとイエスは、マリヤとエリサベツがいとこ同士であったため、またいとこの関係にあたります。

そしてガブリエルはこう告げました——

「あなたは、まだ男性を知らないのに、みごもるでしょう。」

マリヤは尋ねました。

「どうしてそのようなことがあり得るのでしょうか？」

ガブリエルは答えました。

「聖霊があなたを覆います。

そして、あなたの内に宿るその聖なる方は、神の子と呼ばれるのです。」

48 さて、ここで大きな違いに注目してほしいのです。

兄弟よ、衝撃に耐えられる心の備えをして、よく聞いてください。

あの祭司ザカリヤは、信じるための前例がいくつもあった

にもかかわらず、妻が年老いてから子を産むということを疑いました。

自分の妻と共に生活して子が与えられる——

それは過去にもあった出来事です。

一方、この小さなおとめマリヤは、これまで一度も

起こったことのないこと——

処女が子を宿すという前代未聞の出来事を信じなければ

なりませんでした。けれども彼女は疑うことなく、

御使いの言葉をそのまま受け取り、喜び始めたのです。

私が思うに、エバンズビルをはじめ、この世界が今必要としているのは——

神の言葉をそのまま信じ、喜び始めることができる、

もっと多くの「マリヤたち」です。

マリヤは、命を感じるまで待ちませんでした。

確証が得られるまで待ちませんでした。

ただ、神の言葉を受け取り、そのまま信じたのです！

ですから、

「手が少し動くようになったら信じよう」

「足がもう少し動いたら信じよう」

——そんなふう待つのではなく、

今、信じて、喜び始めなさい！

ハレルヤ！

神の言葉をそのまま受け取れば、それは必ず、

神が言われた通りの実を結びます。

アーメン！

兄弟よ、私は今まさに、聖霊に満たされた喜びであふれています。

どうせあなたは私のことを“ホーリーローラー”と呼ぶでしょうから、

さあ、今からそう呼び始めてもかまいませんよ！

49 ああ、人々が神の言葉をそのまま受け取るとき！

神が「あなたを癒す」と言われたなら——信じなさい。

神が「聖霊を与える」と言われたなら——信じなさい。

神が「永遠の命を与える」と言われたなら——信じなさい。

神は今も御使いを持ち、今も人を遣わし、

今も御働きを行っておられます。

すべて、昔と変わらず備えておられます。

そして、必ずその御言葉を信じる人をお持ちです。

私は小さなマリヤが、「私は男を知らないけれど、赤ちゃんを授かるの」

と言いながら歩いている姿を思い浮かべます。

「それでも私は授かるの、必ずね。」——ああ、マリヤ!

医者がこう言うのが聞こえます。

「ちょっと、マリヤ、それは困ったことになるぞ。

そんなことを証しし始めたら、熱狂的すぎると見なされて、

あそこのホーリーローラー連中と同類にされてしまうよ。まったく…」

しかしマリヤはこう答えます。

「お医者さま、今そうであるかどうかは関係ありません。

私は必ず授かります。神がそう言われたのですから。」

アーメン!これで決まりです。

神がそう言われたら、それが真つすぐな基準なのです。

さて、マリヤは田舎へ向かいます。ああ、なんと!

彼女は従姉のエリサベツに会いに行こうとしていました。

エリサベツのことを聞き、その様子確かめたかったのです。

エリサベツは6か月間身を隠しており、

まだ胎動を感じていませんでした。

そこへ、マリヤが駆け寄ってくるのです——

兎に角兆候も何もありませんが、「必ず授かる」と信じて、

喜びに満ちていたのです。

50 こうしてマリヤはエリサベツに会いに行きます。

エリサベツもまた、マリヤを迎えに出てきて——私は想像しますが——彼女を抱きしめ、

「まあマリヤ、あなたに会えて本当にうれしいわ、愛しい人」と言って、

互いに抱き合い、頬に口づけを交わしたことでしょう。

昔は、女性たちはそんなふうにあいづちをしたものです。

男性たちも、素晴らしい交わりを持っていました。

けれども、それはどこかで失われてしまいました。

そうです——私たちはもう互いに愛を持たなくなっていました。

互いへの思いやりもなくなりました。

今や、隣人が亡くなったことを知るの、新聞の訃報欄を見た時だけ——

そんな時代です。

誰ももう、互いのために心を動かすことがなくなっていました。

昔、ケンタッキーでは、誰かが病気になると、みんなで集まってとうもろこしの皮をむき、薪を割るなどして助け合ったものでした。

今では、そんなことを知っている人はほとんどいません。

兄弟愛が、まるで消えかけているように思えます。

本当に悲しいことです。

51 そして私は、マリヤとエリサベツが互いに抱きしめ合う姿を思い描きます。

ここで、ちょっと妻の話をしましょう——彼女はこの辺のどこかに座っているはずですが、まだ私のことを見つけていないでしょう。

少し前のことです。私たちは車で街を走っていました。

すると、ある女の子が「こんにちは、ブラナム姉妹!」と声をかけてきました。

ところが、妻は何も返事をしません。

私は言いました。

「今、あの子が君に声をかけたよ。」

すると妻は、

「ちゃんと返事したわよ。」と言います。

「でも、僕には聞こえなかったけど?」と私。

すると妻はこう答えました。

「だって、笑顔を返したもの。」

52 ちょっとした作り笑い——でもね、私は昔ながらの、

しっかり握るメソジスト風の握手が好きなんです。

兄弟よ、そこには温かい気持ちがこもっています。

ポール・レイダーがあるとき話してくれたことがあります。

彼と奥さんが、ちょっとした口論をしていたそうです。

彼は食卓で新聞を読んでいて、いつもは家を出るときに

奥さんにキスをしてから出かけるのですが、

その朝、ドアのところへ行くと、奥さんはうつむいて立っていました。

それでも彼女は唇を突き出し、彼は軽くキスをしました。

そして、いつもなら彼が門を出たところで、彼女は立ち止まり、

彼が門を閉め、振り返って「さようなら」と言うのを待っていました。

その朝も、彼は振り返って「さようなら」と言いました。

すると彼女も「さようなら」と答えました。

彼はそのまま通りを歩いて行きましたが、

だんだんと考え込んでしまったのです——

「もし今日、自分に何かあったらどうだろう？

主は、私がこんな気持ちのままにいることを望まれないはずだ。

もしかすると、自分のほうが悪かったのかもしれない……」と。

53 彼はそのことを考えれば考えるほど心が落ち着かなくなり、とうとう家に引き返しました。

門をくぐり、ドアへ駆け寄り、勢いよく開けると——

彼女はドアの後ろで泣いて立っていました。

彼は何も言わず、ただ彼女を見つめ、腕を取り、自分の胸に引き寄せて、力いっぱい抱きしめ、そしてキスをしてからこう言いました。

「さようなら。」

彼女も「さようなら。」

彼は門を出て、それを閉め、もう一度振り返って言いました。

「さようなら。」

彼女も再び「さようなら。」

そして彼はこう思ったのです——

「唯一違っていたのは、最後の『さようなら』には気持ちがこもっていた。」

その通りです。

兄弟よ、私は信仰についても同じことを思います。

信仰には「気持ち」がこもっていなければなりません。

そこに何か確かなもの、実在するものがなければならぬのです。

それは、神が近くにおられることを知り、感じさせるものであり、

この人は私の友であり、兄弟であると実感できる——

それこそが、本当の交わりなのです。

54 私は、マリヤとエリサベツがそこで喜びにあふれ、

楽しい時を過ごしている様子を思い描きます。

マリヤがこう言うのが聞こえてきます——

「まあエリサベツ、本当にうれしいわ。

あなたのような年配の方が赤ちゃんを授かるなんて！」

エリサベツは答えます——

「そうなの。でもね、マリヤ、少し心配なことがあるの。

私はもう六か月も身を隠しているけれど、

まだこの子に命の動きがないのよ。」

それは普通ではありません。

人間の発育で言えば、二～三か月もすれば胎動があるのが普通です。

六か月経っても動きがないというのは、異常なことでした。

エリサベツは心配していました。

するとマリヤは話し始めます——

「実は、私のところにガブリエルが来て、私を覆い、

男の人を知らないままで子を宿すと告げたのです。

そしてその子の名を『イエス』と呼びなさいとも言われました。」

55 そして、マリヤが「イエス」とその名を口にした瞬間——

小さなヨハネは胎内で命を受け、喜びのあまり飛び跳ね始めました。

兄弟姉妹よ、これは驚くべきことです。

人間の唇によって「イエス・キリスト」という御名が初めて語られたその時、

死んでいた赤子に命が吹き込まれたのです。

もしその初めての一言が死んだ赤子に命を与えたのなら——

神の力によって生まれ変わった教会に、それはどれほどのことをもたらすでしょうか!

この時、赤子はただ命を受けただけでなく、

永遠の命を受け、母の胎内で聖霊のバプテスマを受けたのです!

ハレルヤ!

ああ、私は今、心から信仰に燃えています。

兄弟よ、聞いてください。

マリヤがその御名——「イエス」と語った時、

エリサベツは同時に聖霊を受けました。

彼女はこう言いました——

「わたしの主の母が、どうして私のところに来られたのでしょうか。

あなたのごあいさつが私の耳に届いたとき、

私の胎の子は喜びのあまり躍ったのです!」

ハレルヤ!

56 兄弟よ、もしその御名が死んだ赤子に命を与えることができるなら、

神の御霊によって新しく生まれた病人や病を抱える人には、

なおさら命を与えるではありませんか。

それは必ず死を取り除き、命をもたらします。

神の御子——イエス・キリストという、あの偉大で素晴らしい御名。

なんと素晴らしいお方でしょう。

ああ、もっと語る時間があればよいのですが、

時間がすぐに過ぎてしまいます。

急ぎましょう。

では、少しこの場面を見に行きましょう。

小さな赤子ヨハネが生まれた時のことです。

彼は墓地へは行きませんでした——いや、神学校にも。

(私に言わせれば、墓地も神学校も似たようなものです。)

私はいつも、神学校出身の説教者を、孵卵器でかえされたヒヨコのように感じてきました。

ただ「チュツチュツ」と鳴くだけで、母鳥のもとに行くこともできない。

機械的に作り出された存在なのです。

57 これが、今日多くの説教者たちに起きている問題です。

神のことを何も知らず、癒しの力や神の力そのものを否定する——

それは、ほんとうの「父」のもとに行ったことがないからです。

彼らが頼れるのは神学校だけ。

私は、たとえ全世界が私に反対しても、

いつでも聖霊に後ろ盾になっていただくほうを選びます。

神が御言葉を、しるしと不思議を伴って確認してくださるなら、

それが自分がどこから来た者なのかを証明してくれるのです。

アーメン!

——アーメンとは「そのとおり、そうあれかし」という意味です。

怖がらないでください、これまで一度も誰かを傷つけたことはありません。

私はここでずいぶん唾を飛ばしてしまっていますが、

それはカナンの新しいぶどうをたくさん食べてきたからです。

クローバーを食べる馬のように、唾が出るんですよ。

でも聞いてください、兄弟。

私は自分がどこに立っているのかを分かっています。

ただ興奮しているわけではありません——確信を持って立っています。

だから人を傷つけることはありません。

心を開き、そこに入り込んでください。

それが正しい道なのです。

58 私がまだ小さな少年だったころ、よく泳ぎに行きました。

私の服装はいつも他の子よりずっと簡単で、古びたオーバーオール一枚。

留め具は、釘をボタン代わりにして、腰ひもは藁縄でした。

田舎育ちの兄弟たち、そんな経験ありませんか？

泳ぎに行くときは、みんなで走って行って、誰が最後に水へ入るか競争するんです。

私はいつも一番でした——だって靴を脱ぐ必要がなかったんですから。

靴なんて持っていませんでした。

することといえば、釘を外すだけ。

そうすると服は空中にひらひら舞い、私はもう水の中です。

他の子たちは、まず私が水の様子を見るのを待っていました。

水が冷たければ指を1本立て、ちょうどよければ指を2本立てて合図しました。

私が2本立てると、服があちこちに脱ぎ散らかされ、みんな一斉に飛び込みます。

兄弟たち、今、まだこの「プール」に飛び込んだことのない方々に言います——

私は今、指を2本立てています。「ちょうどいい温度だ、入っておいで!」と。

飛び込んでみてください。本当に素晴らしいとわかります。

神の霊が人々の中を流れ、

聖霊の聖めの力が、清め、癒す。

ああ、なんとすばらしいことでしょう。アーメン。

59 気づいてください——ああ、私はヨハネが生まれたときのこと

思い描きます。

一体どんな赤ん坊だったのでしょうか？

彼は神学校(セミナリー)には行きませんでした。

その代わりに荒野へ出て行き、神と共に過ごしました。

家系図(ジニアロジー)の研究をするのではなく、

ひざまずいて祈る「ニーオロジー(kneel=ひざまずく からの洒落)」

を学んだのです。

だからこそ、彼は語るべきことを知っていました。

ヨハネは荒野から出てきましたが、

タキシードを着て、後ろ向きの牧師カラーをつけ、

一日三回フライドチキンを食べるような姿ではありませんでした。

そうではなく、大きな羊の毛皮を体に巻きつけて現れ、

「悔い改めよ!」と叫びました。ハレルヤ!

そして、そのメッセージはヨルダン周辺全域を揺り動かしました。

今日、エバンズビルでも、そしてどこであっても必要なのは、  
罪と妥協しない——そうです——

福音を真っ直ぐに語る、そんなバプテストの説教者たちです。

60 あのヘロデが、兄弟フィリポの妻を連れて出てきたとき——

誰かがこう言うのが聞こえてきます。

「結婚や離婚のことなんて説教しないでくださいよ」

しかしヨハネは、その男の顔に指を突きつけてこう言いました。

「あなたが彼女を妻にするのは律法にかなっていない！」

ハレルヤ！

聖霊のバプテスマを受けた人が、

目の前の罪を非難せずにいられるでしょうか？

——できるはずがありません！

ふう！ ああ、気分がいい。

兄弟よ、聞いてください——

あなたは言うかもしれません、「あんたは狂ってる」と。

結構です、もし私が狂っているなら、そのままにしておいてください。

私は今、とても楽しいのです。

私はキリストを得るために、この世に対しては「正気」を失いました。

そうです、世にとってはいつも馬鹿げたことのように見えるものです。

でも、世の目にどれほど愚かに映ろうと、私は楽しんでます。

一つ言えるのは——

私は世の価値観を持っていた頃よりも、

今の「この心」を持っている方が、

ずっと多くの喜び、健やかな健康、

そして繁栄を味わっているということです。

アーメン。

61 さて——小さなヨハネを見てください。

あの人はそこに立って、ただひたすらに説教していました。

ああ、なんと見事に、斧を木の根元に振り下ろしていたことでしょう。

「良い実を結ばない木は、みな切り倒されて火に投げ込まれる」

——なんというバプテストの説教者でしょう！

兄弟よ、このバプテストは聖霊を受けていたのです。

そうです、本当に力強く説教したのです。

そして彼は、それを「信じたとき」に受けたではありません。

それは、全くもって「受けるに値しない恵み」によって与えられたものでした。

——それが、他のすべての人も同じように受ける方法です。

信じたときではなく——

「信じたあとで聖霊を受けましたか？」

神の賜物は永遠のいのちです。

聖霊のバプテスマが下ると、しるしと不思議が伴います。

アーメン。

ああ、なんと主を愛していることでしょう。

神はいつもご自分のことばを守られます。

神は百回中九十九回ではなく、百回中百回、必ずそのことばを守られます。

62 私はこう思います——

イスラエルが旅をして、エジプトを出て、約束の地へ渡ったとき、

神は必ず彼らを守ると約束されました。

神は、ご自身が約束されたことを、まったくそのとおりに行う責任を負っておられるのです。

彼らが川を渡ったとき、食べるものもなく、行く場所もなく、

ただ、神が預言者を通して語られた「わたしがあなたを守る」ということば一つを頼りに進みました。

そして彼らは川の向こう岸に立ち、

背後には主人たち(エジプトの追手)が死に、海に横たわっていました。

——なんと栄光に満ちた時だったことでしょう!

少し前、私は「エデンから出た二つの木」という題で説教しました。

そのとき、私は「あれはホーリーローラー(熱心に主を賛美する者)たちの一団だった」と言ったのです。

すると誰かが私に問いました。

「あなたは、あの偉大な預言者モーセがホーリーローラーだったと言うのですか？」

私はこう答えました。

「もちろんそうです。確かに彼はホーリーローラーでした。」

「なんですって、ブラナム兄弟、それは馬鹿げている!」

63 私はこう言いました——

「あなたに一つ言わせてください。

モーセが紅海を渡ったあと、

彼を追い立て、人々にやりたくないことをさせ、

まるで古い汚れた習慣や罪の道のように、

あちこち引きずり回していたあのすべてのもの——

それが海に沈んでいくのを見たのです。

あなたもそうでしょう。

心の奥底では、それが悪いことだと分かっているのに、  
外に出てやってしまう。

あなたはそれに縛られた奴隷なのです。

モーセは、それらがすべて紅海に溺れたのを見たとき、  
手を高く挙げ、御霊のうちに歌い始めました。

すると、彼の姉である女預言者ミアムがタンバリンを手に取り、  
御霊のうちに踊りながら川辺を走り出しました。

そしてイスラエルの娘たち全員が、  
彼女について踊り出したのです。」

アーメン!

64 もしこれが「ホーリーローラー集会」でないというなら、私はそんなものを見たことがありません。アーメン、アーメン。

思い出します——少し前にここでも話したことを。

私は山を通るのが好きで、狩りをするのも好きです。

なぜなら、森の中で一人になれるからです。

2年ほど前、ブリティッシュコロンビアを通った時のことでした。

その夜、狩りをしていて道に迷ってしまったのです。

舗装道路から1100マイルも離れた場所でした。

私たちは何頭もの馬で移動していて、私はグリズリーベアを追っていました。

しかし、どこかで迷ってしまい、どちらに行けばいいのか分からなくなったのです。

そこで私は思いました。

「主よ、あなたが私を連れ戻してくださるでしょう。

あなたこそが、ここで共にいてくださるお方です。」

日が暮れ、月が出てきました。

私は馬に乗って進み、やがて「ブローオーバー」と呼ばれる古い倒木地帯に入りました。

正確には「バーンオーバー」——かつて大きな木々が立ち並んでいた場所が、  
火事で焼けて立ち枯れてしまった一帯です。

月明かりが差し込んでいました。

もし「不気味な場所」というものを見たいなら、

ああいう場所に入ってみるべきです。

ううむ……あれは神学校よりもよほど不気味です。

- 65 そして、そこに入って行くと——あの大きくて古く、  
不気味な木々が立ち並んでいる。  
すると突然、大きな風がやってきました。  
天から吹き下ろす激しい風です。  
その風が古い木々に当たると、ますます不気味になって、  
木々は「ムウウウ……ウウウウ……」とうなり始めました。  
私は思いました、「ああ、これは……」。  
それからこうも思いました。  
「あの大きな木々を見てごらん。なぜ……ああ、  
ただまっすぐに突っ立って、  
ピシッと固く、動きもしない。  
風が吹いても『ムウウウ……』と音を立てるだけだ。」  
すると、ヨエル書のことを心に浮かびました。  
「バツタが食べ残したものを、いなごが食べ、  
いなごが食べ残したものを、剪定虫が食べ……」  
そうです、ヨエルの預言です。  
確かに、一つが食べ残したものを、別のものが食べ尽くした。  
最初はとても悪い光景のように思いましたが、  
やがてヨエル書3章の御言葉を思い出しました。  
——「わたしは回復する、と主は言われる」。
- 66 私は思いました——「主よ、この部分はどこに当てはまるのですか?」と。  
すると、またあの風がそこを吹き抜けていきました。  
私は馬を止め、その場でまるでホーリーローラーのように、  
思いきり叫びながら賛美を始めました。  
両手を高く上げ、神をほめたたえながら、  
木の周りをぐるぐると走り回っていたのです。  
馬は耳を立て、首を下げて、  
「いったい何が起きているんだ?」と言わんばかりに私を見つめていました。  
でも私は、あまりにも喜びに満ちていて止まれませんでした。  
なぜなら、私は“何か”を見たからです。  
あの大きな木々を見て、私はこう思いました。  
——「そうだ、これはまるで、大きくそびえ立つ教会のようだ」と。  
神がペンテコステの日のように、

激しい大風を送られても、  
彼らにできることと言えば、墓石のように突っ立って、  
「ムウウウ……奇跡の時代はもう終わった。ムウウウ……  
神の癒しなんてない。ムウウウ……  
あれはホーリーローラーだ。ムウウウ……  
関わらない方がいい。ムウウウ……」  
と、ただうめき声をあげるだけなのです。

- 67 私はこう思いました——「神よ、では一体なぜ、この風を送られたのですか？」と。  
すると、再び風が吹いてきました。  
その時ふと見ると、下の方に低木の群れ——  
若くて小さな木々がたくさん生えていました。  
その木々に風が当たると、  
彼らは生き生きとして、しなやかに揺れ、  
まるで喜び踊っているようでした。  
私は叫びました。  
「これだ！これこそホーリーローラーの集会だ！  
——『わたしが回復させる』と主は言われる——まさにこれだ！」  
確かに、あの大きな木々も“教会”であることは否定できません。  
しかし兄弟よ、その命は食い尽くされてしまっているのです。  
メソジストが残したものをバプテスト派が食い、  
バプテスト派が残したものを長老派が食い、  
長老派が残したものをルーテル派が食い尽くしたのです。  
その結果、ある者は“癒し”を取り去り、  
ある者は“異言”を取り去り、  
また別の者は、その他の多くのものを取り去ってしまった。  
今残っているのは、  
聖書が語ることを何ひとつ信じない、  
大きくて硬直した組織だけなのです。  
ハレルヤ！その通りです。

- 68 しかし兄弟よ、神はこう言われました——  
「わたしは回復させる」。ハレルヤ！  
すると、そこに下から「ホーリー・ローラー（聖霊に満たされた人々）」の群れが現れました。彼らは青々

と、しなやかに風に揺れる木々のようでした。

人々は言いました——「あなたには学問がないじゃないか」。

私は瓢箪のように青いかもかもしれませんが、神が風を送られるなら、思いきりその風に身を任せることができます。アーメン！

人々が「お前は狂っている」と言っても、私は気にしません。

ただ、風と共に喜び踊れるだけ十分に青いのです。

御霊が吹くときには、ただ身をゆだねるのです。

主は言われます——「わたしはリバイバルを送り、聖霊の力を注ぐ」。

「信じます、主よ、私は信じます！」——ただ喜びながら。

「わたしはあなたを癒す主である」。

「信じます、主よ、私は信じます！」アーメン！

ああ……もし私が今の二倍の大きさだったら、二倍も良く感じられるかもしれません。

しかし、もしそうなったら……この喜びをどうやって抑えられるか分かりません。

69 ああ、そうですとも。はい、兄弟。

神はご自分の御言葉を必ず守られます。モーセともそうされました。いつも守られるのです。

私は、あの夜のことを思い出します。彼らがそこへ入って行ったとき、パンはありませんでした。わずかにあったパンも、頭の上の容れ物に入れて運んでいた分は、翌朝にはすっかりなくなっていました。その日一日、何も食べるものがなかったのです。

彼らが横になったとき——それは彼らの心配することではありません。食べ物はなく、入れるトウモロコシ畑もない。作物を育てる場所もない。ただ大きな荒野が広がっているだけで、草の芽一つさえ生えていません。

「私たちはどうやって食べ物を手に入れるのだろうか？」

それはあなたが答える質問ではありません。それは神の領分です。

神はこう言われました——

「わたしがあなたを養う。わたしは主、エホバ・イルエ(主は備えてくださる)、主が備えられた犠牲。道がない時に道をつくるのはわたしだ。わたしがその道である」。

さて、翌朝、彼らが外に出てみると……パンが地面一面に横たわっていました。

マナです。そうでしょう？ 彼らはそれを拾い、食べ始めました。

「んん……蜂蜜のような味がする」と言いました。

あなたはこれを味わったことがありますか？

これこそが、自然のイスラエルにおける「最初の教会」の旅路の始まりだったのです。

70 では、霊的な意味における「第二の教会」の旅路の始まりを見てみましょう。

五旬節の日がついに来たとき、彼らはあらゆる所から集まり、一つ所にいました。すると突然、天から激しい風が吹いてくるような響きが生じ、その座っていた家全体を満たしました。そして、炎のような舌が分かれて現れ、それぞれの上にとどまりました。

おやおや、次の瞬間には神の力が彼らに臨み、メソジストだとかバプテストだとか、そんな所属のことな

どすっかり忘れ、通りへ飛び出しては叫び、よろめきながら歩き回りました。マリヤも一緒でした。他の者たちもみな、神の力のもとで叫び、踊り、まるで酔っ払いの集まりのように振る舞いました——聖書にそう書かれています。

すると、あの堅苦しいパリサイ人たちが周りに立ち、「この人たちは新しいぶどう酒に酔っているのだ」と言いました。

そのときペテロがその中に立ち上がって言いました——

「イスラエルの人々、またユダヤに住むすべての人々よ、このことを知って、わたしの言葉に耳を傾けなさい。今は朝の9時であって、あなたがたが思っているようにこの人たちは酔っているのではない。これは、あのことなのです」。

71 「もしこれが“あれ”でないのなら、“あれ”が来るその日まで、わたしはこれを握り続けます。アーメン。そうです。

こう言ったのです——『これは、預言者ヨエルを通して語られた、あのことです。「終わりの日に、わたしはわたしの霊をすべての人に注ぐ」と主なる神は言われた。あなたがたの息子や娘は預言し、若者は幻を見、老人は夢を見る。また、わたしの僕やはしためにも、わたしはその日、わたしの霊を注ぐ。そして天にはしるしを、地には不思議なわざを現す…』——と。」

彼らがそのような語り合っている時、まるで天からのマナがああ使徒の上に惜しみなく降り注いでいるようでした。そうです、兄弟。

人々は尋ねました。「私たちはどうすればいいのですか？」

するとペテロは答えました——「あなたがた一人ひとり、悔い改めなさい。そして罪の赦しのために、イエス・キリストの御名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、聖霊という賜物を受けるでしょう。この約束は、あなたがたと、あなたがたの子どもたち、そして遠くにいる者、すなわち、わたしたちの神である主がお召しになるすべての者に与えられているのです。」

それは何だったのでしょうか？——あの最初のマナが降った時と同じことです。彼らがそのマナを翌日まで取っておこうとすると、中にはうじ虫がわき、腐ってしまったのです。

今日の多くのペンテコステ派の教会に起きている問題も、まさにこれと同じです——霊的に停滞し、古くなったまま、うじ虫がわいてしまっているのです。

そしてこう言うのです——「ああ、私は十年前に聖霊を受けました」と。

けれども——“では、今日のあなたはどうかですか？”

そうです、兄弟。それこそが重要なのです。

72 兄弟たちよ、同じ場所に二度、火を焚くことはできません。さあ、もっと前に進みましょう。神は、さらに別のものを私たちに備えておられます。そうではありませんか？

神はアロンにこう言われました——

「外に出て、大きなオメル（約2.3kg）の器に二つ、いや、いくつかいっぱいマナを取りなさい。それを至聖所の奥に納め、これから先、祭司職に入るすべての者がそこへ来て、その初めの日に降った本物のマナを一口食べられるようにしなさい。」

ああ、これはなんとペンテコステの型であったことでしょう！

人が神のもとに来るとき——今や彼らは聖霊のバプテスマを求めます。そして、その時には壁が崩れ落ち、手のひらいっぱい、口いっぱいどころか、心いっぱいにまで、あのペンテコステの日に降った本物のマナ、すなわち聖霊のバプテスマを受けることができるのです。

それは似たようなものではありません。本物の、オリジナルの、あの日に伴ったのと同じしるし、同じ不思議、すべてが伴う、あのまことのものです。

神が私たちに聖霊のバプテスマをお与えになるとき、私たちは再びそれを受けます。

73 あのマナは、どれくらいの間降り続いたのでしょうか？

それは、イスラエルの民が約束の地に入るその日まで、降り続けました。

そして聖霊も同じです——ペンテコステの日から今に至るまで、そして私たちが約束の地に入るその日まで、共におられるのです。アーメン！

これこそ、今日の教会に必要なものです。そうです、兄弟。

ただの会員数の増加ではありません。「44年までに百万会員」などといったスローガンや、ありとあらゆる標語ではありません。

人を集め、握手を交わし、バプテスマ槽に入れて水に浸し、また引き上げる——しかし彼らは外へ出ると、タバコを吸い、娯楽に興じ、ダンスに行く……。

それは、まるで豚が泥沼に戻り、犬が自分の吐いたものに戻るようなものです。

確かに、これはきつい言い方かもしれませんが。薄めたミルクではありません。

ですが、兄弟——はっきり言わせてください。

今日の教会に本当に必要なのは、昔ながらのパウロ時代のリバイバルと、聖書が語るまことの聖霊のバプテスマなのです。

これこそ、私たちが今求めるべきものなのです。

74 思い出しますが——そう、そう長くはない前のことです。いや、もう少し前になるでしょうか。

ある時、私の目の前を多くの人が通り過ぎていくのを見ながら、ふとこう思ったのです——「そういえば……」。

そこで、私と兄は一匹の年老いたカメを見つけました。その姿と見たら、実におかしなものでした。

あのカメは、だらりと足を垂らして、ゆっくりと大股で歩いていました。

私が近づくと、そのカメは「シュツ」と音を立てるようにして、すぐに首も足も殻の中へ引っ込めてしまいました。

その様子を見て、私はこう思いました——「ああ、これはまるで、少し厳しい御言葉の説教を聞いただけで『もうあんな教会には二度と行かない。いやだ、いやだ』と言ってしまう人たちのようだ」と。

そこで私は、「よし、このカメを歩かせてやろう」と思い、細い枝を取って、軽く叩きました。けれども、いくら叩いても出てこないのです。叩いて無理やり歩かせることはできません。

「ならば……」と思い、私はカメの甲羅をつかんで持ち上げ、川まで運び、ドボンと水の中に放り込みました。

すると、ただ少しの泡がポコポコと浮かんできただけで、そのカメはやっぱり殻の中にじっとこもったままでした。

75 兄弟よ、人はこうもあかも——前向きでも後ろ向きでも、二回でも三回でも、好きなようにバプテスマを施すことができます。

けれども、本当に新しくされていなければ——乾いた罪人が水に沈み、濡れた罪人として上がってくるだけなのです。

水面に泡が少し浮かび、パツと散っては消える……しかし中身は何も変わっていません。

それで私はどうしたと思いますか？——紙切れと木切れを集めて火を起し、そのカメをその上に置いたのです。

そうしたら、兄弟……あのカメは歩き出しました！

今日、あなたが必要としているもの、私が必要としているもの、そして教会が本当に必要としているもの——それは、バプテスマの方式についての論争でも、この教会かあの教会かという議論でもありません。

私たちが必要としているのは、天から降る聖霊と火の注ぎです！

神が聖霊を注がれるとき、人々は必ず立ち上がり、歩き始めるのです。心配はいりません。アーメン、そうです！

ああ、私はイエス様がお戻りになるのを見ることができます——そう思うと胸が熱くなります。

……私の話はいよいよ長くなってしまいますね。

しかし、兄弟よ、この本文の時代において、主イエスはあまりにも大きな御働きゆえに、ご自分の家を離れざるを得ませんでした。

けれども、その家を離れたとき——病がそこに入り込んだのです。

76 兄弟姉妹、今日ここで、はっきりと申し上げます。

あなたの家庭からイエス様が離れられるとき——そこには必ず病が入り込みます。間違いありません。

イエス様を追い出してしまえば、困難は必ずやって来るのです。

祈りの部屋の代わりにトランプのテーブルを置いたら……はい、もうその時点で、困難は向かってきています。そうです。

聖書の代わりに、古びた恋愛小説や雑誌を置いたら……困難はすぐそこまで来ています。間違いありません。

教会に行くことをやめ、牧師が「女性がショートパンツを履くのは淑女らしくない」と語ったことで腹を立てるなら——あなたはすでにその道を歩み始めています。

そうです、困難はあなたに向かってやって来るのです。

そのまま歩み続ければ、やがて自分でその結果を知ることになるでしょう。

77 この場合、彼らはイエス様を追い出したわけではありませんでした。

しかし、御父がイエス様に幻を与え、別の場所へ行くように導かれたために、主はそこを離れられたのです。

すると、困難がやって来ました——ラザロが病気になったのです。

歴史家たちによると、ラザロは肺に重い病を抱えていたと言われていています。医者たちも手の施しようがありませんでした。

そこで、彼らはイエス様を呼びに人を遣わし、ラザロのために祈っていただくこうしました。

しかし、イエス様は来られませんでした。そのまま別の道を進まれたのです。

もう一度、彼らは使いを送りました。しかし、主はやはり来られず、そのまま行かれました。

もしそれがあなたであったなら——兄弟、きっとこうしたでしょう。

メソジスト教会からバプテスト教会へ移って、推薦状を持って行ったかもしれません。

「もうあの古い牧師とは関わらない」と。

あるいは、ペンテコステ派からナザレン派に移ったかもしれません。

「もうあの人たちとは付き合わない」と。

そうやってすぐに移ってしまう——だからこそ、神はあなたのために何もおできにならないのです。

そうです、兄弟。それが真実です。

78 あなたは自分の推薦状(教会からの紹介状)を、あちらこちらの教会へ持ち歩いている——もう紙がすり減るほどに。

兄弟よ、一度でいいから、あなたの名前を天に記していただいたらどうですか？

そうすれば、もうずっとそこに留まるのです。そうでしょうか？

もう推薦状を持ち歩く必要はありません。

「私は信仰告白による手紙でこの教会に入りました」——信仰告白？

悪魔だって神を信じ、そして震えているのです。それは、あなたが新しく生まれた証拠ではありません。

それは、あなたが本物のクリスチャンである証拠でもありません。

神の御霊に満たされるまでは、あなたは依然として闇の中にいるのです。

そうです、兄弟。

よく考えてください——ここにいたのは、信仰告白と、教会から教会へ持ち歩く推薦状だけの人々でした。

兄弟よ、それが恥ずかしいことでないなら、私はまだ恥を語ったことがありません。

あなたが必要としているのは、子羊の命の書にあなたの名が記されることです。

そうすれば、神がそれを守ってくださいます。そうではありませんか？

これこそ、今日私たちが必要としているもの——昔ながらのリバイバルです。

79 ふと思い出したことがあります——先ほどのカメの話の続きのようなものですが、急に頭に浮かんできました。

あるとき、私は釣り糸でカメを捕まえたことがありました。大きなスッポンでした。

しかし、針を外すのが嫌だったので、その場で首を切り落としてしまったのです。

そして、そのまま岸に放り投げました。

しばらくして、弟が池のほとりを歩いてやって来ました。

「ビリー、さっき何を釣ったの？」と彼が聞きました。

私は「カメだよ」と答えました。

すると彼は「それで、カメはどうしたの？」と聞くので、

「殺したんだ。あそこの黒人の人たちに持って行って、スッポンスープにしてもらおうと思ってね……。あれは大きなやつだったんだ」と言いました。

すると弟は「死んでるの？」と聞きました。

私は「もちろん」と答えました。

弟は「でも、首がないよ」と言いました。

「そうだよ、首はあっちに転がっているんだ」と私は答えました。

80 弟は首のあった場所まで歩いて行き、棒切れを拾って、その首の方へ差し出しました。

すると、そのカメは——もう首が切り離されているのに——パクツと噛みついたのです。

首を持ち上げるようにして、その棒を「カチン」と噛んだのです。

弟は言いました——「ねえ、ビリー、本当に殺したんじゃないの？」

私は答えました——「首と胴体を切り離したんだ。だから、死んではいると思うよ。」

弟はもう一度棒を差し出しました。するとまた——[ブラナム兄弟が手を叩く]——パクツと噛みつきました。

弟はこう言いました——「これって、死んでるけど、自分が死んでるってわかってないんだよね？」

そうです、兄弟——今日、多くの人々がまさにこの状態です。

霊的に死んでいるのに、それに気づいていないのです！

しかし、イエス・キリストがあなたを生きさせてくださいます。

そうです！ああ、なんと栄光なことでしょう！

81 私は今、主が都に入って来られる姿を見ます——勝利をおさめ、しばらく離れておられた主が、今、戻って来られるのです。

そこに、小さなマルタがいます。ラザロはすでに葬られていました。

彼は死んで四日が経ち、すでに腐敗し、悪臭を放っていました——言葉は何でもいいですが、私の子どもたちにわかりやすく言えば「腐っていた」のです。

だから彼らはラザロを墓に納め、蓋をし、そして家に帰って行きました。

四日間が過ぎ、すべての希望は消えました。あの小さな家族にとって、これほど暗い時はかつてなかったでしょう。

その時です——「イエス様が来られる」という知らせが耳に入りました。

これこそ、主らしいではありませんか？

最も暗い時に、主イエスはやって来られるのです。

あなたもそうではありませんでしたか？

私もそうでした——レイビルのユダヤ人病院で、医者から「あと三分の命だ」と告げられて横たわっていたとき、イエス様が来てくださったのです。

ミルトアンのジョージ・カーターという少女がいました。

九年八か月もの間、ベッドに横たわり、彼女の教会では「奇跡の時代は終わった」と教えられていました。

しかし神が私に幻を見せ、「あそこへ行け」と言われたのです。

その時、彼女はまさに死にかけていました。体重はわずか37ポンドしかありませんでした。

けれども——その時、イエス様が来られたのです。

そうです、いつもそうなのです。

一番暗い時に、イエス様は来られるのです。

私の家族の中でも、あまりにも暗く、どちらに向かえばいいかわからないような時がありました。

けれども、その時にも——イエス様が来てくださったのです。

82 イエス様が町に入られたとき——マルタには、主を非難する権利があるように思えました。

こう言うこともできたはずです——

「どうして、あの時来てくださらなかったのですか？ 私の兄のところに！」

けれども、もし彼女がそうしていたなら——その奇跡は決して起こらなかったでしょう。

皆さんも礼拝の場でご覧になるでしょう。

神の御前に敬虔に近づく人たちが、何を受け取るかを。

それは、何事に対しても同じです——「どのように近づくか」がすべてを決めるのです。

マルタも、その「近づき方」が正しかったのです。

確かに、彼女には責める理由があるように見えました。

今日のアメリカ人の言い方で言えば——

「もう、あんな牧師とは何の関わりも持ちたくないわ」——そう言えたはずです。

周りの人たちは、きっと彼女を嘲笑ったでしょう。

「おい、あの“ホーリー・ローラー(熱狂的信者)”の説教者はどこへ行った？ 病人を癒すだの何だのと騒いでいたじゃないか」

「ほら見ろ、あいつの友達が死んだ途端に、どこかへ行っちゃった。どうだ、あの男は？ お前たちが教会を離れてまでついて行ったあの説教者だぞ。あんなに大した者だと思っていたのに、本当の試練が来たら、姿を消したじゃないか」

83 けれども——マルタは御言葉を読んでいました。

彼女はかつて、シュネムの女の話を讀んだことがあったのです。

神が彼女に子どもを与え、エリシャがそれを告げたあの出来事です。

その子どもが死んでしまったとき、シュネムの女は理由がわかりませんでした。

けれども、彼女はエリシャのもとへ行ったのです。

私はその場面が好きです——彼女はこう言いました。

「このラバに鞍をつけてください。前へ進みなさい。私が命じない限り、止まってはなりません。」

彼女はカルメル山へ、神の人である預言者を探しに行こうとしていました。

彼女はよく知っていたのです——その預言者は神の代理人であると。

彼女はなぜその子どもが取られたのかわかりませんでした。

もともと彼女は不妊で、エリシャに「子どもが与えられる」と告げられ、その通りになったのです。

ところが、その子どもが10歳か12歳になった頃——おそらく午前11時ごろのこと、日射病にかかったのでしょう——突然「頭が痛い」と泣き出しました。

父親はその子を畑から家に戻しました。

母親の膝の上に横たわったその子は、正午ごろに息を引き取りました。

すると彼女は、その子を抱き上げ、エリシャの部屋のベッドに寝かせたのです。

84 兄弟よ——あの女は何かを知っていたのです、そうでしょう？

子どもを安置するのにふさわしい場所——それは預言者の部屋、牧師の寝床でした。

彼女はその子をベッドの上に寝かせ、ラバに鞍をつけて出発しました。

神は、ご自身のしもべにすべてを明らかにされるとは限りません。

エリシャが彼女の姿を遠くに見つけました。

彼は言いました——「あれはシュネムの女だ。彼女の心には悲しみがある……だが神は私にそれを隠されている。何があったのかわからない。」

私はこのやり取りが好きです。

彼はこう尋ねました——

「あなたにすべてよろしいか？ ご主人はご無事か？ 子どもはどうか？」

彼女が預言者のもとにたどり着くと、こう答えたのです——

「すべてよろしいです。」

いいですね……「すべてよろしい」。

子どもは亡骸となり、夫はまるで狂ったように家の中を歩き回り、自分の心も張り裂けそうな状態であっても——彼女は言いました、「すべてよろしい、すべてよろしい」と。

そして彼女は神の代理人のもとへ行き着きました。

あなたが牧師のもとへ行くべき時のように。

彼女は駆け寄り、エリシャの足もとにひれ伏し、胸の内を明かしました——「子どもは死にました」と。

するとエリシャはしもべのゲハジに言いました——

「腰に帯を締め、私の杖を取って、その子の上に置きなさい。」

85 私は思うのですが——パウロが人々に手ぬぐいやハンカチを置いて祈ったのは、この出来事から取ったのではないのでしょうか。

エリシャは、自分が触れるものがすべて祝福されることを知っていました。

彼は知っていたのです——自分の身体のうちには神の力があることを。

自分は神の大樹から伸びた枝の一本であることを。

そして、神は自分を通してしか働かれない——なぜなら自分は神の代理人だからです。

だから、自分が触れるものは、神が祝福されるのです。

それで彼は言いました——「私の杖を取って、その子の上に置きなさい。」

しかし、その女の信仰は杖にはありませんでした。

彼女はこう言いました——

「主なる神は生きておられ、あなたの魂も決して死なない——私が何かを知るまで、あなたから離れることはありません。」

私はこの姿勢が好きです——最後まで諦めず、離れずにいる決意です。

そこでエリシャは自分の腰に帯を締め、出発しました。

ゲハジは先に進みました。

ここで、牧師の皆さんにも覚えておいてほしいことがあります。

エリシャはゲハジにこう言いました——

「もし誰かが話しかけても、口をきくな。何も言うな。ただ、この使命を果たしなさい。」

86 もし私たち説教者が、もっとこのように——神からの使命に専念し、人々が何を言っているかに耳を貸さずに進んで行くな——もっと良い結果が得られるでしょう。もっと多くの働きが進むはずです。

エリシャは言いました——「誰とも話してはならない。」

それで、彼はゲハジの後に従いました。

ゲハジは家に入り、その杖を子どもの上に置きました……。

しかし——もちろん、何も起こりませんでした。

そうです、当然です。女の信仰は杖にあったのではなく、預言者本人にあったからです。

そして預言者エリシャが到着すると——よく見てください——彼はいきなり中に入り、神に必死にすがったわけではありません。

まず部屋に入り、床を行ったり来たりと歩き始めました。

何度も部屋を往復しながら、どうすべきかを思案していました。

彼は知っていたのです——神が自分のうちにおられることを。

そこで彼は、その亡くなった子どもの上に自分の身体を重ねました。

自分の唇をその子の唇に、自分の鼻をその子の鼻に合わせ、しばらくそのまま横たわりました。

すると、子どもの身体が温かくなっているのを感じました。

彼は再び部屋を歩き来しながら祈り、また子どものもとへ戻り、再び自分の身体を重ねました。

すると——その子は七回くしゃみをして、生き返ったのです。

そうでしょう？

87 さて——マルタは、あのシュネムの女の物語を読んでいたに違いありません。

そして、もし神がエリシャのうちにおられたなら、確かにその御子のうちにもおられることを知っていました。

兄ラザロは死んでいました。

しかしマルタは、それでもイエス様にお会いしたかったのです。

彼女はイエス様のもとへ向かいました——それは主を責めるためではなく、礼拝するためでした。

彼女は駆け寄り、主の御足もとにひれ伏しました。

よく見てください——彼女が神にどのように近づいたか。

自分の願い通りにしてくれなかったからと責めるためではなく、

礼拝するために御足もとにひれ伏したのです。

彼女は正しい心の態度で主のもとへ来ました。

私たちもそうでなければなりません。

神に近づくときは、正しい心の態度で来なければならないのです。

マルタは主の御足もとにひれ伏して言いました——

「主よ」——これこそ、イエス様の正しい称号であり、ご自身が名乗られたお名前です。

「主よ、もしあなたがここにいてくださったなら、私の兄は死ななかつたでしょう。」

よく見てください——彼女は正しい場所で、正しいお方の前に立っていました。

深い悲しみに包まれ、やせ衰えたその目は涙で腫れ、頬には涙の跡が残っていました。

きっと美しい女性だったでしょう。しかし今は、家計を支える者を失い、兄は死に、葬られて四日が経っていました。

その体にはすでにウジがわいていたのです。

それでも彼女は言いました——

「もしあなたがここにいてくださったなら、私の兄は死ななかつたでしょう。

けれども、たとえ今でも——」

私はこの「たとえ今でも」が好きです。

「今でも、あなたが神に求められることは、何でも神はなさいます。

たとえ今——主よ、彼は死んで、すでに四日が経ち、もう臭くなっているとしても——今でも、あなたが神に求められることは、何でも神はなさいます。」

そうです、その通りです。

88 兄弟よ——私はまるで、歯車がかチリと噛み合って動き出すのを見るようです。

何かが必ず起こる状態です。

彼女は正しいお方の前に立ち、正しい態度で、正しい近づき方をしていました。

すべてが整い、正しく動き始めていたのです。

あなたも今、このような状態になれるのではありませんか？

マルタは言いました——

「たとえ今でも、主よ、あなたが神に求められることは何でも……」

たとえば——医者があなたに「もう長くは生きられない。がんだ」と告げたとしても、

それが何だというのでしょうか？

「たとえ今でも、主よ……」

主は今もあなたの祈りを聞いておられます。

神の右の座におられ、とりなしをしてくださっているのです。

そうではありませんか？

「たとえ今でも、主よ、あなたが神に求められることは、何でも神はなさいます。」

するとイエス様はおっしゃいました——

「あなたの兄はよみがえります。」

マルタは答えました——

「ええ、主よ、知っています。終わりの日に、彼はよみがえります。あの子は良い人でしたから、終わりの日にはよみがえると信じています。」

彼らユダヤ人は「終わりの日の一般的なよみがえり」を信じていたのです。

89 イエス様は言われました——

「わたしは、よみがえりであり、いのちである。」

ああ、この御言葉はなんと力強いことでしょう。

「わたしは、よみがえりであり、いのちである。」

わたしを信じる者は、たとえ死んでも生きる。

また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことがない。

このことを信じるか？」

兄弟よ、イエス様は見た目にはさほど立派には見えなかったかもしれませんが。

しかし、そのうちには神の真理の言葉があり、いのちをもたらす力がありました。

主は再び言われました——

「わたしは、よみがえりであり、いのちである。」

わたしを信じる者は、たとえ死んでも生きる。

また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことがない。

このことを信じるか？」

マルタは答えました——

「はい、主よ。私はそのすべての言葉を信じます。」

あなたこそ、この世に来られるはずの神の御子であると信じます。」

90 ここに神の代理人であるお方がおられます。

そしてここに、心の砕かれた一人の女性がいます。

向こうには、すでに死んだ人が横たわっています。

この心砕かれた女性は、完全な信仰をもって、神の賜物であるこの方——神の御子、世界に与えられた最大の賜物——を正しく認め、正しい称号をもって呼び、正しい礼拝を捧げていました。

彼女は言いました——

「私は、あなたこそ神の御子であり、あなたが神に求められることは何でも、神がなしてくださると信じます。」

これは、必ず何かが起こる信仰です。

彼女は言いました——

「はい、主よ。私は信じます。あなたこそ、この世に来られるはずの神の御子です。」

すると主は言われました——

「彼を、どこに葬ったのですか？」

そして主は向かわれました。

——さて、少し昔のことですが、私は「イエス・キリストは神ではない」と信じている女性に会ったことがあります。

皆さん、これは今日、多くの教会で普通に教えられていることだにご存じですか？

彼らは、イエスは単なる預言者か、あるいは善い人にすぎなかったと考えているのです。

しかし——もしイエスが神でなかったなら、何者でもありません。

もし神でなかったなら、イエスは世界史上最大の詐欺師です。

もし単なる預言者にすぎないなら、その血は私の血以上の価値はありません。

イエスは神です！

人である以上の存在——まことに神御自身であるお方なのです。

91 さて、ここにいるこの教会の方々——私は笑いものになっているのでも、あなた方を押しつけようとしているのでもありません。

しかし、これはクリスチャン・サイエンス(心霊療法を説く宗派)の話です。

その女性が私に言いました——

「もし、イエス様がただの普通の人だったと証明できたら、あなたはそれを受け入れますか？」

私は答えました——

「はい、もし聖書でそれを証明できるなら。」

彼女は言いました——

「私は聖書で、イエスがただの人であったことを証明します。」

私は答えました——

「確かに、イエスは人でした。しかし、同時に神の御子でした。」

彼女は言いました——

「いいえ、それでもただの普通の人だったのです。」

私は言いました——

「イエスは人である以上の方——

神御自身が降りてこられたお方なのです。」

彼女は言いました——

「イエスは神ではありませんでした、ブラナム兄弟。」

そしてこう続けました——

「私は聖書でそれを証明します。」

私は尋ねました——

「どこでそれを証明するのですか？」

92 彼女はヨハネの福音書11章を開き、こう言いました——

「ラザロの墓に行かれたとき、イエスは涙を流されました。」

それは、イエスが神ではなかった証拠です。なぜなら、神なら泣くことはできないはずだからです。」

私は思わず声を上げました——

「おやおや！」

そして言いました——

「その理屈は、餓死した鶏の影から取ったスープよりも薄っぺらいですな！」

「そんなもので何かを支えることはできません。」

「つまりあなたは——イエスが涙を流されたから神ではないと信じているのですか？」

彼女は言いました——

「そうです。」

私は答えました——

「確かに、イエスはラザロの墓へ向かわれるとき涙を流されました。それは人としての姿です。

しかし同時に、イエスは“神の人”でした——神はキリストのうちにあつて、この世をご自分と和解させておられたのです。」

「イエスは泣いておられたときは人でした。

しかし、あの小柄な御体を伸ばし、四日間も墓に横たわっていた男の前に立ち、こう叫ばれたとき——

『ラザロよ、出て来なさい!』——兄弟、それはただの人間ではありません。

それは、肉の唇を通して語られた神ご自身の声だったのです！」

四日間も死んでいた男が、再び地上に立ち、生き返ったのです。

その魂や体がある間どこにあつたのか、私は知りませんし、あなたも知らないでしょうから、そのことは議論しません。

しかし、とにかく彼は四日間死んでおり、体にはウジが這っていました。

それが——主が「ラザロよ、出て来なさい!」と言われた瞬間、立ち上がり、生き返ったのです!

兄弟、それはただの人ではありません——まさしく神だったのです。

93 確かに——あの夜、山から降りて来られたときのイエス様は、人としての姿でした。

お腹が空いて、あたりを見回し、木に実を探されましたが何もなく、その木を呪われました。

空腹のとき、主は人であられたのです。

しかし——五つのパンと二匹、いや三匹の小さな魚を取り、それで五千人を養われたとき——

それは人以上のお方でした!

それは、主のうちにおられた神ご自身の御業でした!

そうです、兄弟。それは確かに神のわざです。

あの夜、船の上で眠っておられたときも、主は人としての姿でした。

波に揺れるその小舟は、まるで瓶の栓のように上下し、海の一萬の悪霊たちが「今こそ溺れさせてやる」と誓ったかのような様子でした。

悪魔はこう言ったでしょう——

「今こそ捕らえたぞ。あの人は眠っている。病人を癒すあまり、疲れ切って身動きもできない。」

そうです——眠っておられたとき、主は人でした。

しかし——その足を船べりに置き、天を仰いでこう言われたとき——

「静まれ、黙れ！」

それは人以上のお方でした！

それは、御子を通して語られる神の声だったのです。

ハレルヤ！

94 彼はカルバリーで、あの十字架の上で憐れみを求めて叫ばれたとき——

それは人としての叫びでした。

しかし、イースターの朝、彼が死と地獄の束縛を打ち破って

よみがえられたとき、それは単なる人ではありませんでした。

それは、御子のうちにおられる神でした。——信じますか？

私は信じます——昨日も、今日も、永遠に変わらない同じイエスが

おられることを。——信じますか？

私は信じます——祈りの列に加わることができなかった一人の女性が、

ただ主の衣の裾に触れただけで、完全に癒されたことを。——

信じますか？

私は信じます——盲人の目を開き、

耳の聞こえない者に聞こえるようにし、

口のきけない者に語らせるのは、イエス・キリストであることを。

——信じますか？

私は信じます——昨日も今日も、永遠に同じであられる

イエス・キリストが、この人々に聖霊を与え、叫び、喜び、

賛美させておられることを。

——信じますか？

私は信じます——聖霊は今、まさにここにおられることを。

——信じますか？

私は信じます——主はこの会堂のすべての人を癒す備えを

しておられることを。——信じますか？

私は信じます——主はこの場にいる一人ひとりを聖霊の

バプテスマで満たす備えをしておられることを。——信じますか？

ハレルヤ！

95 私は信じます——主は今ここにおられる、と。

あなたもそう信じますか?—信じますか?

では、立ち上がって、今この時、主を賛美しましょう。

私は信じます—あなたは聖霊のバプテスマを受けるでしょう。

信じますか?

天の父よ、昨夜なされたことを、今夜も行ってください。

聖霊の力がこの会堂全体に降り注ぎますように。

神よ、疑いと恐れを取り去り、

今この瞬間、聖霊のバプテスマをお与えください。

私は信じます—主はここにおられ、

あなた一人ひとりを満たされます。

信じますか?

私は信じます—もしあなたが癒しを受け入れるなら、

その車椅子から立ち上がれるでしょう。

信じますか?

私は信じます—もしあなたが癒しを受け入れるなら、

その寝台から起き上がれるでしょう。

信じますか?

私は信じます—主は今、その癌を癒すためにここにおられます。

信じますか?



[www.messagehub.info](http://www.messagehub.info)

説教の語り手

ウィリアム・マリオン・ブラナム

"...第七の御使が吹き鳴らすラッパの音がする時には、神がその僕、預言者たちにお告げになったとおり、神の奥義は成就される。" 黙示録 10:7